

## 福島原発事故による避難者受け入れと「ボランティア」

### —福島県檜枝岐村と群馬県片品村の事例から—

関礼子・鬼頭秀一

- 1 はじめに—「尾瀬のある村」の避難者受け入れ
- 2 檜枝岐村の避難者受け入れ状況
- 3 檜枝岐村における観光と「ボランティア」
- 4 檜枝岐村にみる「双方向的ボランティア」
- 5 片品村の避難者受け入れ状況
- 6 片品村における観光と「ボランティア」
- 7 尾瀬の村の「地域力」という「減災力」
- 8 おわりに

### 1. はじめに—「尾瀬のある村」の避難者受け入れ

2011年3月11日に東日本大震災が発生した。津波が町を飲み込んだ。東北の被災地を中心に大規模な停電が続き、交通網も各地で寸断された。地震による家屋の損壊に津波が追い打ちをかけた。北から新地町、相馬市、南相馬市、浪江町、双葉町、大熊町、富岡町、檜葉町、広野町、いわき市。被害の大小はあるが、福島県の太平洋に面した全ての市町に例外なく、津波は海岸沿いの集落や田畑を襲った。なかでも、市街地が川沿いに形成された自治体の被害は甚大だった。川に沿って内陸部にまで押し寄せた津波は、容赦なく家屋を破壊し、命をさらった。沿岸には数百人の遺体が浮いていると報じられるなか、なおも余震が続いた。

続く福島第1原子力発電所事故（原発事故と略述）は、地震と津波から避難所へと逃れた人々を不安と恐怖に陥れた。原子力緊急事態宣言が出され、第1原発から半径3km内の住民に避難指示、半径10km内の住民に屋内退避が指示された。

翌12日、事態は刻一刻と変わった。避難指示が半径10kmに拡大されたのに加え、福島第2原子力発電所でも原子力緊急事態宣言が出され、半径3km内の住民に避難指示、半径10km内の住民に屋内退避の指示が出された。福島第1原発1号機で水素爆発があり、避難指示は福島第1原発から半径20kmに拡大されることになった。3月14日には第1原発3号機、15日には4号機と2号機が爆発し、第1原発の半径20kmから30kmの住民に屋内退避が指示された。

避難範囲の拡大は、避難者の受け入れに対応した隣接自治体が、息つく暇もなく、今度は受け入れた避難者と共に避難する事態を生んでいた。避難指示や屋内退避指示が出され

た自治体<sup>1</sup>は、最終的に、双葉町、大熊町、浪江町、富岡町、楡葉町、南相馬市、飯館村、川俣町、葛尾村、田村市、川内村、広野町、いわき市の13市町村に及んだ。これら自治体にとって、東日本大震災は、自然災害と人的災害による複合災害の様相を呈するものになった。

なかでも南相馬市は、鹿島区、原町区、小高区のいずれもが、津波で甚大な被害を受けた自治体である(図1)。それは、しばしば「壊滅的被害」と報じられた。しかも、南相馬市は福島第1原発から10km圏内(主に小高区)、20km圏内(主に原町区)、それ以外(主に鹿島区)と、対応がそれぞれ異なる3つの区域に分断され、4月22日からは警戒区域、計画的避難区域、緊急時避難準備区域となった<sup>2</sup>。2006年に鹿島町、原町市、小高町が合併して生まれた南相馬市は、皮肉にも原発事故によって、それぞれ旧市町の区域ごとに異なる対応を迫られることになったのである。

本稿は、このような状況下にあった南相馬市から避難者を受け入れた、福島県南会津郡檜枝岐村と群馬県利根郡片品村の事例を報告する。檜枝岐村と片品村は、いずれも「尾瀬の村」である。尾瀬は、日本の自然保護運動を牽引してきた「自然保護の聖地」であり、先駆的な自然保護活動や施策が展開されてきた「自然保護のフロント・ランナー」である。2007年には、日光国立公園から独立し、29番目の国立公園として尾瀬国立公園が誕生した。この尾瀬への福島県側の玄関口が檜枝岐村、群馬県側の玄関口が片品村となる。2つの村は、福島第1原発事故後すぐに村独自で被災者受け入れのための財政措置を講じ、避難者を村の宿泊施設に受け入れた。本稿は、この2つの村の避難者受け入れ状況を考察し、災害発生時の自治体施策のあり方や、災害時のボランティアの在り方について検討していく。

---

<sup>1</sup> 後に原発避難者特例法の指定市町村となった自治体である。

<sup>2</sup> なお、緊急時避難準備区域に関しては9月30日に解除された。

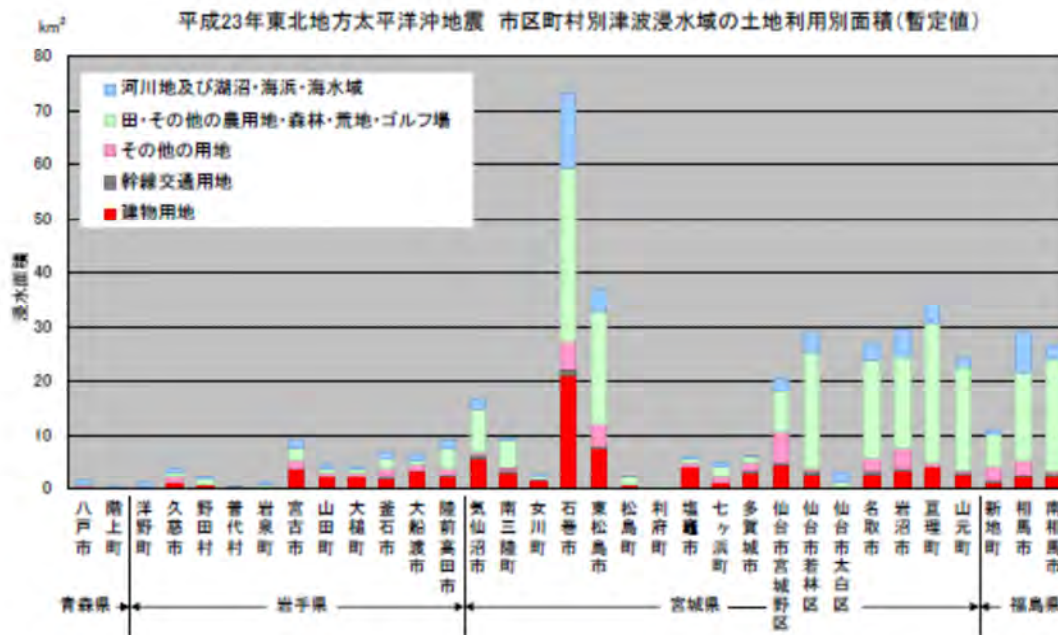


図1 津波浸水被害の状況

出典：平成23年3月28日国土地理院「津波心水域の土地利用別面積（暫定値）について」（3月29日訂正版）、[gisstar.gsi.go.jp/2011TaiheiyouOki/LandUse/LandUseArea.pdf](http://gisstar.gsi.go.jp/2011TaiheiyouOki/LandUse/LandUseArea.pdf)（最終閲覧日：2011年10月29日）

## 2. 檜枝岐村の避難者受け入れ状況

檜枝岐村は、群馬県、新潟県、栃木県に県境を接する、1村1集落の山あいの村である（写真1）。人口609人、202世帯（2011年4月末現在）の小さな村は、江戸時代から続く農村歌舞伎（写真2）を現代に伝える「伝統の村」であり、「尾瀬檜枝岐温泉」や「ミニ尾瀬公園」を村内観光資源とする「尾瀬の村」である。「尾瀬檜枝岐温泉」には泉質の異なる2つの源泉があり、全戸に温泉が引かれている。「燧の湯」と「駒の湯」、「アルザ尾瀬の郷」という3つの日帰り温泉もある。村内には34軒の民宿、5軒の旅館、8軒の山小屋と11のキャンプ場があり、日本百名山に数えられる会津駒ヶ岳と燧ヶ岳がある。

雪深い檜枝岐の観光シーズンは、5月12日の愛宕神祭礼奉納歌舞伎に始動し、雪解け水にミズバショウの花が揺れ、尾瀬が山開きする5月末頃から本格化する。東日本大震災が発生した3月11日、檜枝岐村はひっそりと訪れる人もまばらな冬であった。

会津地方に、東日本大震災の被害はほとんどなかった。檜枝岐村では、固定電話や携帯電話がつながりにくいといった不便を除けば、さしたる影響もなかった。ガソリンや灯油をはじめ、生活物資の不足がいくぶんかはあったが、問題になるほどではなかった。会津には、新潟県からの物流ルートがあったからである。



**写真1** 檜枝岐村集落全景

出典：関礼子撮影



**写真2** 千葉家之家花駒座の檜枝岐歌舞伎

出典：檜枝岐村提供

会津と新潟県の結び付きは、地理的にも歴史的にも強い。尾瀬沼や猪苗代湖は新潟県を流れる阿賀野川の源流のひとつであるし、阿賀野川の上流域となる新潟県東蒲原郡（現在の阿賀町と阿賀野市の一部）は会津領だった。また、新潟県と福島県は磐越自動車道で結ばれている。新潟県は福島県からの県外避難者の最多受け入れ県になったが、それはガソリンに余裕のあった人々が放射能から逃れようと、浜通りから中通りへ、中通りから会津、そして新潟県へと磐越自動車道を走り続けた結果であった。

震災被害がなかったことに加え、磐越自動車道から幾分離れた場所に位置しているため混乱が少なかった檜枝岐村は、被災地支援や避難者支援を展開する「支援自治体」となった。3月11日以降9月末現在までの檜枝岐村の主な取り組みは、(1)炊き出し支援、(2)村独自の財政措置による避難者・被災者受け入れ、その延長としての(3)大熊町小中学生とその家族の学習教育支援のための受け入れ、(4)2次避難者の受け入れ、(5)尾瀬檜枝岐温泉震災支援事業の実施の5点である。

## 2.1 緊急物資の支援（3月12日～3月31日）

檜枝岐村では、福島県からの要請に応じて緊急物資の支援を行った。役場職員や商工会女性部、夫人消防隊などが炊き出しを行い、村の特産品でもある「尾瀬の自然水」とともに、おにぎりを被災地に届けた。炊き出し支援は中学生や高校生<sup>3</sup>も含めて189人、20日間延べ人数909人が協力し、33,896個のおにぎりをつくった。村民からは食材提供や電気釜の貸与などがあり、まさに村ぐるみの支援になった<sup>4</sup>。

<sup>3</sup> 檜枝岐村には高校がないので、中学を卒業すると村を出て寮生活をしながら高校に通うことになる。ここで参加した高校生は、春休みで村に戻ってきていた高校生である。

<sup>4</sup> 檜枝岐村公民館 2003『檜枝岐村公民館報 檜枝岐』第169号（5月24日発行）、10頁。

## 2.2 自主避難者（被災者）の受け入れ（3月15日～31日まで）

炊き出し支援は重要ではあるが、檜枝岐村に特徴的な支援形態ではない。檜枝岐村の避難者支援で特筆すべきは、原発事故後の早い段階で、自主財源による避難者受け入れ施策を展開したことである。

契機になったのは、第1に福島県から避難者受け入れの要請があったことである。星光祥檜枝岐村長は、即座に、避難者1人（1泊3食）につき3,000円を村が民宿・旅館に支給し、避難者100人程度を無料で宿に受け入れるための予算措置を決断した。避難所を新規に開設するのではなく、民宿・旅館を避難所と看做したのである。

「いつもは、3月にスキーのイベントがあり、村は宿泊客でいっぱいになるのですが、震災の影響でイベントは中止になって、お客さんがこない状況でした。公共施設で受け入れるのでは、まだ寒い時期でもあるし、炊き出しなどを考えると役場には余力がなく、2、3日ならともかく長期受け入れは困難なので、民間で受け入れようと。観光で成り立っている村なので、民間に助成をすれば、観光協会や宿泊施設がしっかりしているので、あとは任せられると考えたわけです。」<sup>5</sup>

当初、受け入れ予定だった川内村からの避難者は、郡山まで来たところで長時間の移動を避けて、檜枝岐村には来なかった。その理由を、星村長は「どこに行くかわからないままバスに長時間乗っていて、疲れたのだろう」と推測する<sup>6</sup>。

第2の契機は、同じく3月14日、いわき市から自主避難の親戚・家族10人が村の民宿H1に自主避難してきたことにある。檜枝岐村では、夏場は山小屋やかつての出作り地・開拓地に泊まり込みになる村民もいるが、冬場は本村の集落に集住している。集落の端から端まで歩いて30~40分ほどの小さな村である。どんな情報もすぐに伝わる。避難者が檜枝岐の民宿にやって来たという情報も、避難者受け入れをするに決断するに十分な契機であった。

3月15日には、星村長が尾瀬檜枝岐温泉民宿組合に対して避難者受け入れについて説明し、プレスリリースするとともに、即日から避難者受け入れを実施した。民宿・旅館の受け入れ対応がまだ整っていない段階での施策実施であったが、村内に大きな混乱はなかった。この施策により、避難者は金銭的負担なしに、肉体的・心理的ストレスの少ない避難生活を送ることが可能になった。檜枝岐村には、表1に示すように、後に原発避難者特例法の指定市町村になる富岡町、南相馬市、大熊町だけでなく、郡山市、福島市、須賀川市、矢吹町、鏡石町、小野町からの自主避難者や地震による家屋半壊の被災者計129人が訪れ

<sup>5</sup> 2011年10月31日、星光祥檜枝岐村長へのヒアリングによる。

<sup>6</sup> 2011年10月31日、同上、星村長へのヒアリングによる。なお、川内村は郡山市のビックパレットを避難所とし、ビックパレット内に役場機能を移転させ、4月12日に役場を開設した。

避難者（被災者）住所	人数	備 考
大熊町	74	運転手や役場職員 6 人を含む 68 人は学習教育支援で来村。
いわき市	25	群馬転出 2 人、帰宅 23 人。
南相馬市（原町区）	11	帰宅 11 人。
富岡町	4	猪苗代転出 4 人
小野町	4	帰宅 4 人。
須賀川市	3	自宅半壊 3 人、帰宅 3 人。
鏡石市	3	自宅半壊 3 人、帰宅 3 人。
福島市	2	帰宅 2 人。
郡山市	1	帰宅 1 人。
矢吹町	1	自宅半壊 1 人、帰宅 1 人。
計	129	

**表 1** 檜枝岐村独自支援策による避難者受け入れ状況（3月15日～31日）

出典：檜枝岐村の資料から作成。「帰宅」は資料に記載された情報であり、実際に帰宅したか否かを示すものではない。

た<sup>7</sup>。

檜枝岐村は長く「秘境」と呼ばれ、旅人の旅情をかきたててきた村である。だが、旅人にとって魅力的な要素が、必ずしも避難する者に選択される要素になるとは限らない。檜枝岐村は幹線道路から大きく外れたところにある。交通の便が良いわけでもないし、3月はまだ雪深く、道路状況も悪かった。この時期の「尾瀬のある村」は、言いかえれば、その先には雪に道路が閉ざされた尾瀬しかない「行き止まりの村」であった。目にみえない放射能の恐怖に怯え、水素爆発した原発からできる限り早く遠ざかろうとする避難者は、いわき市や小野町、三春町のインター・チェンジから磐越自動車道に乗り、会津若松から新潟方面に向けて車を走らせた<sup>8</sup>。檜枝岐は避難の途中に、偶然に辿りつくような場所ではなかった。

<sup>7</sup> 表 1 の須賀川市、鏡石町、矢吹町で自宅半壊の被災をした 7 人は家族・親戚関係にある。檜枝岐への避難者は、大熊町の子供たちの学習教育支援を除き、家族や親戚などを単位にして民宿・旅館で避難生活を過ごした。

<sup>8</sup> 郡山で被災し、会津に身を寄せていた研究者仲間は、「何かあったら磐越道を走り、越後山地を越えて新潟へ」、と考えていたという。県境を越えてすぐの新潟県東蒲原郡阿賀町では、ガソリンスタンドが福島県からの車で混雑した（朝日新聞、2011年3月16日付け）。新潟県での避難者受け入れ数は、3月16日は2,374人、17日は7,280人、18日には6,553人になった。福島県境に近い阿賀町や阿賀野市の避難所には、被災地から避難した人の相談所が開設された（3月22日まで）。新潟県はその後も7～8千人超を受け入れており、長期間、福島県からの県外避難者の受け入れ最多県であった。津波により北へ向かう交通網がダメージを受けたこと、まだ寒い3月の北風が放射能を北へと運んでいくと思われたため、多数の避難者が新潟に向かったと考えられる。なお、8月11日段階で山形県への避難者が10,000人を超え、最多受け入れ県となった（福島県災害対策本部県外避難者支援チーム発表資料）。

では、このような緊迫した状況のなかで、どのような人が磐越自動車道を外れて檜枝岐村を目指したのか。3月14日に最初に檜枝岐村を訪れた10人は、以前に民宿H1に滞在したことがあった。檜枝岐村の民宿はそれぞれ常連のリピーター客を持っており、常連客で成り立っているような宿も多い。そのため、かつて檜枝岐を何度も訪れたことがある人や、檜枝岐村の避難者受け入れ支援に関する情報を得ることができた人が、家族・親戚を連れて檜枝岐に避難したものと考えられる。

### 2.3 学習教育支援（3月22日～3月31日）

表1に示されるように、3月中に檜枝岐村が受け入れた129人のうち74人は大熊町の住民や関係者である。74人中、自力で檜枝岐村に避難してきた人が6人、残る68人は檜枝岐村の学習教育支援で滞在した大熊町の小・中学生やその家族などであった<sup>9</sup>。

檜枝岐村と大熊町は、かつて檜枝岐村で教鞭をとった先生が大熊町の教育長になったという縁で、子供たちの相互訪問による交流事業を行ってきた。この時期、20km圏内の避難指示区域にあたる大熊町は田村市に役場機能を移転しており、住民は田村市の他、三春町、小野町などの19の避難所に避難していた。だが、一時避難所の生活は困難が多い。大熊町の教育長を通して檜枝岐村に相談があり、檜枝岐村は子供たちの学習教育支援という観点から、3月22日から31日にかけて、大熊町の子供たちとその家族などを11の民宿・旅館で受け入れることにした<sup>10</sup>。

子供たちは、雪の檜枝岐でスノーラフトを体験し、檜枝岐村の子供たちとフットサルの交流をした<sup>11</sup>。これらイベントを実施したのは、檜枝岐村有志により2008年に結成された「楽—RAKU—」である。「楽—RAKU—」は、尾瀬や登山ガイド、スノーシューによるツアー、ネイチャークラフト体験などを企画・実施してきた檜枝岐村有志によるガイドグループで、1次避難所で困難な生活を送っていた大熊町の子供たちに、雪と遊ぶ「楽しみ」をプレゼントした<sup>12</sup>。

---

<sup>9</sup>学習支援で大熊町の子供たちが檜枝岐村に到着したときの様子は、映像で見ることができる（「檜枝岐（ママ）村が大熊町の避難者受け入れ」[www.youtube.com/watch?v=0yEfDQKj8uQ](http://www.youtube.com/watch?v=0yEfDQKj8uQ)、最終閲覧日2011年9月1日）。また、新聞紙面でも「滞在中の檜枝岐村で注意事項の説明を受ける大熊町の児童生徒ら」という見出しのもとで紹介された（福島民報HP、2011年3月22日付け記事、[www.minpo.jp/pub/topics/shasintukushuu/2011/post\\_128.htm](http://www.minpo.jp/pub/topics/shasintukushuu/2011/post_128.htm)、最終閲覧日2011年9月1日）。なお、大熊町は3月末に田村市から役場機能を再移転すべく準備をすすめ、4月5日に会津若松市にて役場を開所した。田村市は4月22日に緊急時避難準備区域に指定された（9月30日に解除）。

<sup>10</sup>大熊町の避難者は会津若松市東山温泉他の2次避難所に移動した。

<sup>11</sup>「民宿駒口 山人日記（<http://love-me.cc/blog/komaguchi/index.php?ID=160&PHPSESSID=4a5a68d3749c1bc384825b163b7724ad>、最終閲覧日2011年11月2日）」「尾瀬檜枝岐温泉 かぎや旅館 若旦那の不定期日記」（[kagiya-ryokan.at.webry.info/201103/article\\_9.html](http://kagiya-ryokan.at.webry.info/201103/article_9.html)、最終閲覧日2011年11月2日）などを参照のこと。

<sup>12</sup>「楽—RAKU—」HP（<http://raku-hinoemata.com>、最終閲覧日2011年11月2日）を参照のこと。

## 2.4 2次避難所の受け入れ（4月1日～8月31日）

3月31日をもって、檜枝岐村独自の避難者受け入れは終了し、以後は、福島県の要請で2次避難所として避難者を受け入れることになった<sup>13</sup>。「もう少し長くいることはできないか」という声はあった。3月22日に入村したいわき市の1家族3人（母、10歳と1歳の子）は暦が4月に変わっても滞在していたが、幼稚園が再開するなど、いわき市が日常を取り戻しつつあることから、4月3日に帰宅した。

檜枝岐村では南相馬市からの2次避難者を受け入れた。4月には村内民宿6カ所に南相馬市からの避難者30人が滞在したが<sup>14</sup>、6月17日段階では16人になった。うち、1人は浪江町の住民であった。当初、南相馬市に避難した浪江町住民が、南相馬市の住民とともに避難生活を送ることになったのである。

南相馬市との連絡窓口は観光案内所が行っており、月に1～2回、南相馬市の担当者が避難者のもとを訪れていた。予定では、7月末ですべての避難者が2次避難所を引き払い、仮設住宅へ移ることになっていたが、入居希望の場所によっては仮設住宅の建設が間に合わず、8月以降も2次避難所での避難が続くことが予測された。実際、最後の1人（浪江町住民）が檜枝岐村を離れたのは、8月31日であった。

## 2.5 被災者支援経済活性化事業（7月1日～）

檜枝岐村では、被災者支援と村の経済活性化を目的に、約4,000万円の予算措置をとり、「尾瀬檜枝岐温泉震災支援事業」を実施することにした。この事業は、特別対策事業、元気回復事業、温水プール無料開放事業からなり、事業期間は7月1日から翌2012年3月末までとなっている。

- (1) 特別対策事業…東日本大震災で被災したり、原発事故により警戒区域や避難地域となった福島県内15市町村の住民の山小屋・旅館・民宿宿泊者の宿泊料金を通常の半額程度（3,000円～7,000円）、キャンプ場利用料金を約40%割引とする事業である。利用者には食事券や土産券が贈られる。
- (2) 元気回復事業…特別対策事業対象外にある福島県内市町村の住民の旅館・民宿の宿泊料金を20%割引とする事業である。

---

<sup>13</sup> 2011年6月17日、檜枝岐村企画観光課へのヒアリングによる。これに対し、新潟県では自主避難者を4月以降も引き続き受け入れている（2011年6月24日、新潟県防災局広域支援対策課へのヒアリングによる）。新潟県は福島県から災害救助法に基づく救援要請を受けており、災害救助法では自主避難者か否かは問題にならないからである。なお、救援要請を受けた自治体は、支援経費を福島県経由で国に請求することになるが、これまで国から全額が支払われたケースがない。そのぶんは福島県の負担となることが相当程度に予測されるため、かかった費用を求償しないと決めた自治体もある（新潟日報、2011年6月11日）。また、県知事もこうした問題を含め、「制度全般の見直し」が必要ではないかと発言している（2011年6月15日定例記者会見、<http://chiji.pref.niigata.jp/2011/06/post-3558.html>、最終閲覧日2011年11月2日）。

<sup>14</sup> 福島民友、2011年4月24日。



- (3) 温水プール無料開放事業…福島県内の高校生以下の「森の温泉館 アルザ尾瀬の郷」の屋内温水プールを無料開放とする事業である。

これら事業の実施の背景には、震災後に檜枝岐村を訪れる観光客が半減したことがあった<sup>15</sup>。震災後の自粛ムードや「風評被害」がその理由だと推測される。

### 3. 檜枝岐村における観光と「ボランティア」

述べたように、4月1日以降、檜枝岐村は2次避難者の受け入れを開始した。2次避難者受け入れをめぐるのは、たとえば会津若松市近辺の温泉地では、6月には「避難者受け入れを理由に予約をためらう客がいる」との声も出ていた。自粛ムードが蔓延したこと、福島県の放射線量を懸念する「風評被害」に加え、避難者がいると遠慮して旅行を楽しめないという観光客の心理が客足を落としているのではないかと推測されていた<sup>16</sup>。

檜枝岐村では後者のような話は出てこないが、原発事故の「風評被害」は、どのように経験されたのだろうか。檜枝岐村の中心部は福島第1原発から約150km離れている。茨城県や千葉県、東京都などで次々に高い放射線量が指摘されるなかで、この山あいの村の放射線量が高いという指摘はされることがなかった<sup>17</sup>。そのためか、宿によっては4月中旬の段階で例年より客足が増えたと感じられるところもあった。常連客が「福島県の応援のために」来てくれたからである。だが、そうした宿でも、福島県応援ムードがひと段落する頃には、宿泊客の減少を感じていた。5月の連休も予約のキャンセルがあり、宿は空室が目立った。旅行会社などエージェントが入る大きな旅館は明らかに客足が落ちていたし、蕎

<sup>15</sup> 福島民報、2011年6月17日。ただし、7月初頭には少し持ち直し、前年比約3割減とされた。

<sup>16</sup> 『週刊現代』2011年7月16・23日合併号(52-55頁)に掲載された「消えた観光客 『誰も来ない』この現実を見よ」には、次のような記述がある。「うちのホテルは一泊1万3000円が基本料金。もちろん被災者の方から料金をいただくわけではなく、国から補助金が出るのですが、その額は一人当たり一日5000円。とても利益が出る状況ではありません。経営は厳しくなりますね。それと、大変心苦しいのですが、やはり被災地の方がホテルにいらっしやると、観光に来られたお客様も『私たちだけで楽しんでしまって、申し訳ない』と思われるようで、それも観光客の足が遠のいている原因のひとつかな、と考えてしまいますね」。同様の趣旨での発言は、2011年7月1日～3日に実施した会津若松市周辺でのヒアリングで聞いていたが、避難者と宿とが良好な関係性を保っていたという話はそれ以上に多く聞くことができた。また、新潟県の湯沢温泉では、避難者受け入れ支援と観光とを両立させようという試みが早い時期に模索されていた(日本経済新聞、2011年5月2日)。

<sup>17</sup> 因みに、「福島県放射能測定マップ」(<http://fukushima-radioactivity.jp/environ-mapsearch.php>、最終閲覧日2011年11月2日)で、檜枝岐村の放射線測定値は0.07マイクロシーベルト/時(2011年11月2日測定値)であり、福島原発事故直後の約0.1マイクロシーベルト/時から漸減している。2011年7月14日付け福島県農林水産部の「福島県環境放射線モニタリング調査(民有林)の結果について(訂正(差し替え)版)」で、燧ヶ岳と駒ヶ岳の空間放射線量は路上・林内の地上10cm、50cm、1mで燧ヶ岳が0.12～0.13、駒ヶ岳が0.16～0.18となっている。

麦屋など飲食店も日帰り客の減少に苦しんだ。<sup>18</sup>

### 3.1 避難者受け入れと檜枝岐村の観光

避難者受け入れは、宿泊施設の規模によって異なる状況が生まれる。家族経営の小さな民宿は、たとえ通常料金を大幅に下回る金額でもいくらかのメリットがあるが、大きな旅館などでは人件費や施設運営費をまかなえず、コストがかさむことになる。そのため、損益を出さずに避難者を受け入れるという点では、民宿などの小規模宿泊施設のほうに優位性がある。

とはいえ、これはあくまで一般論である。小さな民宿であれ、収容人数が比較的多い旅館であれ、檜枝岐村での避難者受け入れは、良い意味で淡々としたものだった。もともと、檜枝岐村の民宿・旅館は、家族的で温かなもてなしに定評がある。お客さんに慣れている宿泊施設だから、村としても、避難者を任せて安心なところがあった。

### 3.2 2次避難所としてのメリット・デメリット

では、2次避難者にとって、檜枝岐村はどのようなところであったのだろうか。

実際のところ、檜枝岐村は2次避難所として、誰にでも魅力的なところではなかった。村内に病院がなく、通院するにも不便な場所であった。また、高校がなく、村の子供たちが高校生になると会津田島などで寮生活をするくらいだから、高校生の子を持つ家族が長期に避難生活を送るには適さない。コンビニのない静かな佇まいは観光地として魅力的であっても、生活するには不適と感じる人も多い。そのため、檜枝岐に来た2次避難者は少数で、しかも多くが「帰って行った」。6月中旬に残っていたのは、僅か16人にすぎない。いずれも就学中の子供がおらず、病院に頻繁に通うほど健康上の問題を抱えていない、中高年層である。

だが、檜枝岐村で出会った避難者の様子からは、檜枝岐村の2次避難所としての「心地よさ」を垣間見ることもできた。

檜枝岐村では全戸に温泉がひかれており、民宿・旅館にはそれぞれ温泉があるが、宿泊者は、村内にある3つの温泉施設（駒の湯、燧の湯、アルザ尾瀬の郷）の割引券や無料カードで広々とした内風呂や露天風呂での入浴を楽しめる。避難者も無料カードを借りて温泉施設を訪れる。

4月中旬は、どの家が津波で流されたか、どの家が大丈夫だったか、など、温泉施設では

---

<sup>18</sup> キャンプ場 H2 では連休に親子キャンプの団体予約が入っていたが、「この時期に福島県に行かなくても」という反対の声があったという理由でキャンセルになった。キャンセルの電話の後で、「風評被害だ」と憤りつつ落胆する場面を、たまたま居合わせた関が見ることになった（2011年6月19日）。檜枝岐の民宿は山菜・キノコなど地場の食材を生かした食事で定評がある。そのため、放射能は大丈夫かという問い合わせが入ることがあった。ある民宿では、「東京と同じくらい距離が離れているので大丈夫です」と言っても、「でも福島でしょう」と言われ、返答に窮したと聞いた（2011年11月1日、民宿 H3 でのヒアリングによる）。

深刻な会話が聞かれた。同時に、「南相馬市から避難してきたんです」と、こちらが聞かなくても避難者であることや、自らの避難経験を語ってくれる人に何度も出会った。避難者であることは、檜枝岐村ではマイナスの反応を引き起こすものではなかった。南相馬市の担当者も、「良くしてもらっている」という避難者の声を檜枝岐村に残していた。

### 3.3 避難者が語る檜枝岐村

南相馬市から紹介されて檜枝岐村に来た小高区のAさん夫婦は、震災後、栃木県的那須にある親類の家に1ヶ月ほど避難していた。だが、那須の放射線量が高いということを知ったこともあって、檜枝岐村に2次避難した。車が無い近所のBさん夫婦を誘って檜枝岐を訪れ、4人で民宿H4に滞在することになった。

尾瀬に来たことがなかったAさん夫婦にとって、檜枝岐は「未知の世界」だった<sup>19</sup>。「館岩（旧館岩村、現在南会津町）を抜けると家も少なくなるし、山の中にどんどん入っていく。いったいどんな山奥か。それこそ、家が3軒くらいしかないところではないか」と不安に思うくらいだった。Aさん夫婦にとっての檜枝岐村は、次のように語られる。

「実際に滞在してみると、檜枝岐はいいところなんだ。檜枝岐の人は避難者にとっても良くしてくれる。仲良くなった観光案内所のKちゃんが、先日、仕事が休みの日に尾瀬を案内してくれた。尾瀬は水芭蕉が有名だけど、ちょうど水芭蕉がたくさん咲いていて、いいところだった。今度は、燧ヶ岳に連れて行ってくれるというから、楽しみにしているんだ。

ここ（民宿H4）の親父さん（おじいちゃん）も良くしてくれて、釣りに連れて行ってくれたり、駒止湿原に連れて行ってくれたり、山を案内してくれた。親父さんは山をよく知っているから、一緒に山に入っても面白いんだ。山菜とりに行ったときなんか、ワラビとかイラ（ミヤマイラクサ）をたくさん採って、それこそ30kgの樽に2つ漬けて、白河や東京の親戚に送った。

親父さんは81歳になるというけれど、足が達者で、先代から鉄砲ぶち（猟師）でもあったというんだよね。自分も、南相馬では猟師をしていて、イノシシをとっていたから、話が合う。すっかり仲良くなって、南相馬に一時帰宅したときは、南相馬には行った事がないというので一緒に車に乗って行ったくらい。家の瓦屋のグシのところが悪くなっていて、ビニールシートをかけたついでに、南相馬から宮城県境あたりまで車で走って津波の被害を見てきたんですよ。親父さんは、津波の被害が大きい事にびっくりしていましたね。」

「また檜枝岐では、子供たちもきちんと挨拶してくれて、気持ちがいいんだよね。はじめは、『こんにちは』、『おはようございます』、『ただいま』と、自分達にもきちんと挨拶

<sup>19</sup> 以下、2011年6月18日のヒアリング。括弧内は筆者挿入。

拶してくれることに驚いてね。教育長がいいのか、親のしつけなのかわからないけれど、みんないい子ばかり。今では子供たちに負けないように、こっちから先に『おはよう』、『おかえり』と挨拶するように心掛けているんだ。」

「ここではね、床屋なんかに行ったりしても『避難者だ』というと、『お茶飲んでいきなさい』と誘ってくれる。他の民宿の人も、商売敵なのに、『お茶のみに寄りなさい』と言って、お茶やお茶菓子出してくれて、おしゃべりをさせてくれる。こんなところは他にはないよね。みんないい人ばかりだ。

でも、ここは不自由だと思う人も多かった。多いときには檜枝岐に30人くらい2次避難者がいたけれども、買い物に行くのに遠くて不便だし、病院もない。そういう理由で、少しずつ出て行った。やはり山の中で、町が遠いと寂しい思いをするんだね。自分は(病気で手術をしたこともあって)、ここにずっといるんだけれどね。

南相馬からは放射線情報とかが防災情報で携帯電話に入ってくるけれど、自分の住んでいる地域は、今でも1.8とか、放射線が高い地域なんだね。しかし、檜枝岐がどんなに良いところでも、やっぱり家に戻りたいという気持ちには変わらない。」

### 3.4 村民という「ボランティア」

民宿H4では、避難者と観光客とで食事メニューを変え、毎日の食事に変化をつけているが、品数はさほど変わらない。観光客がいないときには、親父さんが一緒に晩酌するとい、「家族のような」関係だという。夕食時には、若女将が「病院に行きたいと言ってましたね。今度、用事があって町に出ますが、病院に行くなら一緒に行きませんか。用事をすませて、病院が終わる頃に迎えに行きますよ」などと声をかける。

檜枝岐村の避難者には、「ボランティア」という特別な存在は必ずしも必要なかった。村民と避難者との良好な人間関係が、避難者にとっての檜枝岐村を居心地の良いものにしていった。より正確に言えば、村民は「ボランティア」に期待されるような役割を、そうとは思わずに果していた。

Aさん夫婦が“Kちゃん”と呼ぶ観光案内所の女性職員の話は、親しみやすい檜枝岐の雰囲気をもより明確にしてくれる<sup>20</sup>。檜枝岐村の人と山に惹かれていたKさんは、8年前に観光案内所に職を得て、隣の南会津町(旧伊南村)から檜枝岐村に転入してきた。檜枝岐村がかつて「秘境」と呼ばれたのは、隣村とも異なる独自の言葉や文化が息づいていたためだったが、Kさんも伊南とは異なる親しみやすさ、面白さを感じたという。

「ここではお年寄りもお酒をたくさん飲むし、お酒の付き合いが必要だということにびっくりした」というKさんは、もともと「山が好き」だったが、観光案内所に来てからは「どんどん山に登るようになった」。「お客さんに電話で山の様子を尋ねられたときに、ちゃんと答えられるように」、「顔が見えなくても、電話での印象が良ければきっと来てくださるだろうし、来てさえくれれば常連さんになってくださる」、「宿の人にかわいがっても

<sup>20</sup> 2011年6月20日、KSさん(1977年生まれ)へのヒアリングによる。

らっているのに、役に立ちたい」という思いがあったからである。

こうした檜枝岐の人と山への思いは、尾瀬に A さん夫婦を案内するときの思いに通底していた。K さんは、南相馬市との連絡窓口でもある観光案内所の仕事で、4 月からの受け入れに際して、県から 5,000 円の補助が出ることを説明しに旅館・民宿回りをしていた。そのときに、たまたま A さん夫婦と言葉を交わした。「山が好き」だと話したら、「一緒に行きたい」ということになり、案内所が休みの日に民宿 H4 のおじいちゃんや A さん夫婦の知り合いで檜枝岐村外に避難していた人など、総勢 6 人で尾瀬に出かけた。

「宿を回ってみると、避難してきた人が、戻っていく状況なんですね。村が不便で、病院が遠いと。長くいるとあきてくるというか、やはり自分の家に近いところのほうが良いのだと思うんです。

病院も大きいのがありますし。2次避難所は7月いっぱいということになっていますが、どうせ檜枝岐にいるのだったら楽しませたい。戻ったら、もう 2 度と来られないかもしれないだろうな、と思って、尾瀬に出かけました。尾瀬には携帯用のガス（登山用のガス）やイラ、ミソを持って行って、現地でイラの味噌汁を作って食べてもらったりしました。水芭蕉の頃で、まだ残雪がある時期なので、沼のまわりを一周して戻ってきて、ちょうどでした。」

檜枝岐村を楽しんでもらいたい。檜枝岐村の良いところを見てもらいたい。よそから来た人の目に新鮮な檜枝岐村を、村の人にも知ってもらいたい。そうした思いが、K さんにはあった。

#### 4. 檜枝岐村にみる「双方向的ボランティア」

東日本大震災では、被災地を地方自治体がダイレクトに支援する様子に注目が集まった。檜枝岐村のような小規模自治体は、柔軟で小回りがきき、かつスピーディな支援をするうえで優位性がある。「顔が見える関係」で成り立っている小規模自治体は、実態のない住民参加や住民自治では地域を回せない。役場職員が消防団に入り、青年団に入るというように、一人が複数の組織で活動していることが普通である。そのためもあって、何か村が行動を起こすときには、誰がどう動けばいいか、あうんの呼吸でわかるという。

そのため、檜枝岐村の避難者受け入れは、観光の村の日常の延長上にあった。3 月に大熊町の子供たちを受け入れたときに、「楽—RAKU—」がスノーラフト体験やフットサル交流を企画・実施したのは自然な流れであったし、イベントが多い檜枝岐では無理なく運営できた。民宿 H4 をはじめ、村民もまた、ごく自然なかたちで、避難者を村の客人として受け入れた。

観光案内所の K さんがそうだったように、避難者もまた、「身体を動かさなくてはいけないし、世話になっている村に何か恩返しをしたい」と思うようになっていた。A さん夫婦は民宿 H4 の小さな畑で見事な野菜を育て<sup>21</sup>、毎週、月・水・金曜日には、避難者みんなで檜枝岐村にある「ミニ尾瀬公園」の草むしりのボランティアに出て、汗を流した。6月16日には、避難者から社会福祉協議会に「歌と踊りのプレゼント」があった。

「南相馬市小高区より避難されている・・・中略(2人の女性が一筆者挿入)、ボランティアで踊りを披露してくださいました。職員も負けずと、お粗末ながら(オツの悪い?)盆踊りを披露させていただきました。そして踊りの後は、みんなが一緒になってカラオケ大会!『手を叩いて大きな声で笑う』たったこれだけのことですが、不思議と心も体も元気になりますね」<sup>22</sup>

このように、村民と避難者との間では、一方的な「ボランティア」ではなく、「双方向的ボランティア」が成立していた<sup>23</sup>。互酬的な行為とか、相互のコミュニケーションと表現できるような関係性である。

## 5. 片品村の避難者受け入れ状況

檜枝岐から尾瀬沼、尾瀬ヶ原を通過して群馬県に抜けると、片品村である。首都圏からアクセスが良く、夏は尾瀬へのハイカーや登山客、冬はスキー客で賑わう。人口約 5,000 人の村には、単純泉や硫酸塩温泉、アルカリ性単純温泉など 9 つの温泉、7 つのスキー場、約 250 の宿泊施設がある(図 2)。ここに避難者約 1,000 人を受け入れた片品村は、「小さな村の大きな支援」として 2011 年 5 月 26 日付け毎日新聞に大きく報じられた。この記事には、片品村の避難者受け入れの特徴がいくつか示されている。

第 1 は、檜枝岐と同様に、村独自の予算処置をとっての受け入れだったことである。「村には、こつこつ積み立ててきた虎の子の財政調整基金 11 億円があった。『うち 1 億円なら村民の理解も得られるはず』。1 人当たり 1 泊 3 食付き 2500 円で宿泊施設に協力してもらい、村が費用を負担する。1000 人を受け入れられるのは 1 ヶ月と計算し、村長の専決処分で予算化を決意。震災 3 日後の朝、村の幹部会議で受け入れを決めた」のである。

---

<sup>21</sup> 避難者の畑仕事は「やはりプロだから仕事が違う」、「教わることが多い」と、そこそこで聞く。

<sup>22</sup> 檜枝岐村公民館 2003『檜枝岐村公民館報 檜枝岐』第 170 号(7月19日発行)13頁。

<sup>23</sup> 同じような状況は、会津若松市周辺の他の観光地でも聞くことができた。双方向的なボランティアは、人間関係の網の目のなかから生まれてきているが、その状況については別稿に譲りたい。



図2 片品村の宿泊エリア  
出典：「パウダースノーエリアワンダーランド片品」(パンフレット)より。

第2は、南相馬市からの避難者を集団で受け入れたが、高齢者や体調不良者が予期しないほど多かったことである。避難者の約「4割が65歳以上の高齢者で、村の高齢化率27%を上回っていた。翌日の土曜日には、村で唯一開いていた診療所に人が殺到し、パニック状態に」なった。

第3は、高校生や片品村移住者が中心になってボランティア組織「片品むらんでいあ(「むらんでいあ」と略称)」を立ち上げたが、それを可能にした要因として、片品村が進めてきた地域づくりがあったことである。

以下では、この3点に着目しつつ、片品村における避難者受け入れと「ボランティア」のあり方を検証していく。

## 5.1 避難者の集団受け入れ

片品村は、檜枝岐村と同様、3月14日という早い段階で福島県からの避難者受け入れを決めた。もともと片品村は、「尾瀬のある村」として福島県とも交流が深かったからである。千明金造片品村村長は、観光客の収容人数約1万人の片品村は、避難者5,000人を受け入れるのも不可能ではないと、大胆な提案を福島県側に示した<sup>24</sup>。

「片品村がこの度、福島県内被災者の方々の受け入れを、いち早く決定した一番の理由は、被災者の安全安心が確保できると考えたからです。

まず片品村は地震に強い村です。このたびの大震災においても、村内の被害はほとんどありませんでした。また東京電力の計画停電区域外です。つまり停電がないということです。この村にはありがたいことに東京電力の水力発電所が7カ所あります。片品村はライフラインがしっかりしているからこそ、いち早く被災者の受け入れを決断いたしました。」<sup>25</sup>

<sup>24</sup> 2011年7月10日、千明金造村村長へのヒアリングによる。なお、片品村の牧場で避難する酪農家の牛を受け入れもできると提案しましたが、受け入れ要請はなかった。

<sup>25</sup> 片品村役場 HP (<http://www.vill.katashina.gunma.jp/mayor/201103/201103html>、最終閲覧日2011年9月11日)。

3月18日時点		(人)	
南相馬市	原町区	844	938
	小高区	52	
	鹿島区	42	
双葉郡浪江町		17	
双葉郡双葉町		2	
不明		16	
合計人数		973	

**表2** 片品村の避難者受け入れ状況  
出典：片品村から提供のデータによる。

とはいえ、3月はガソリン不足で避難したくても避難できない人がいた。被災した福島県側だけで対応することは難しく、片品村がバスやガソリンを手配し、現地まで避難者を迎えに行くことになった。片品村に打診があったのは、富岡町と川内村の避難者受け入れだった。だが、郡山市まで来たところで、片品村まで行くのは「あまりに遠すぎる」ということになり、受け入れは実現しなかった。だが、振り返ってみれば、「これが予行演習になった」<sup>26</sup>。

次に打診されたのは、福島第1原発5、6号機が立地する双葉町の約2,000人の受け入れか<sup>27</sup>、南相馬からの避難者約1,000人の受け入れのいずれかであると伝えられ、最終的に南相馬市の避難者が来ることに決まった。

片品村は3月18日早朝に23台のバスを連ねて南相馬市の避難者を迎えに行った。表2に示すように、片品村が受け入れたのは973人であった。南相馬市からの避難者は938人で、うち844人が原町地区、52人が小高区、42人が鹿島区の住民だった。南相馬市の住民に混じって、浪江町17人、双葉町2人の住民も避難してきたが、これは檜枝岐村の場合と同様、南相馬市に避難した人が南相馬市の住民と共に避難したものである。

南相馬市は、地震による被害に加え、人口70,895人のうち浸水被害域の住民が13,377人(18.9%)と算出されるくらい大きな津波被害があった<sup>28</sup>。さらに、主に小高区が第1原発から半径20km圏内、原町区が半径20～30km圏内にあることから、原発事故により市民が複数の県に集団避難する事態に追い込まれていた<sup>29</sup>。たとえば、新潟県の三条市や総合

<sup>26</sup> 2011年7月10日、片品村むらづくり観光課へのヒアリングによる。なお、既述のように、檜枝岐村でも川内村の受け入れ打診があったが、同様に郡山市まで来て「遠すぎる」と来ることがなかった。川内村と同様に富岡町も役場機能ごとピックアップに留まった。富岡町のピックアップパレット内の役場開設は、川内村から2日遅れの4月14日であった。つまり、檜枝岐村と片品村は、当初、行動を共にしていた村町を受け入れる予定だったと推測される。

<sup>27</sup> 双葉町は役場機能ごと埼玉県に避難した。

<sup>28</sup> 総務省統計局の「浸水範囲にかかる人口・世帯数(平成22年国勢調査人口速報集計による)」(<http://www.stat.go.jp/info/shinsai/index.htm#map>、最終閲覧日2011年9月10日)。

<sup>29</sup> 3月21日付けで南相馬市長が出した「避難者を受け入れてくださった皆様」に向けた、以下のお礼のメッセージに、南相馬市が被った甚大な被害と混乱・苦悩が示されている(南相馬HP <http://city.minamisoma.lg.jp/mpsdata/web/3756/message01pdf>、最終閲覧日2011年9月11日)。

「震度6弱を記録した地震と、想像を絶する大津波に襲われ、死亡行方不明者約千五百人、全壊家屋約千八百戸と、沿岸部はもとより内陸部まで壊滅的な被害を受け、現在も原子力発電所の事故で市民は圏外退避や自宅退避を余儀なくされております。

この間、国県を始め電気事業者から何ら情報もなく、マスコミからの情報をもとに、市民の安全を守るため手探りで対応をして参りましたが、その様な時に、本当に暖かい援助の手を差し伸べていただき感謝の言葉もありません。」



福祉センターにも、3月16、17日に500人以上が<sup>30</sup>、新潟県燕市の燕・弥彦総合事務組合防災センター等にも約200人が避難した。

片品村が1,000人もの受け入れを決断しえたのは、檜枝岐村もそうであったが、宿泊施設を避難場所と見なしたからだった。村は1人1泊につき2,500円を宿泊施設に支弁することとし、その条件で協力を申し出たホテルや民宿が避難者を受け入れることになった<sup>31</sup>。

とはいえ、受け入れは決してスムーズに進んだわけではなかった。受け入れにあたって、名簿作成のために片品村職員3人が先発隊として出発し、次に残りの職員を乗せたバスが現地へ向かった。3月18日の正午に避難者を23台のバスに乗せ、スクリーニング検査を受け、一行は片品村に向かった。19時頃、千明村長は、避難者の出迎えを兼ねて、夕食を渡すために群馬県の赤城高原サービスエリアまで行って驚いた。「体の不自由な人があんなに大勢いるとは思わなかった」からである。バスには、2台に1人の割合で片品村の職員が乗っていた。だが、「バスには南相馬市の職員が1人もついていないし、各バスの代表者もいない」<sup>32</sup>。

千明村長は、送迎バスのガソリンやホテル・民宿のボイラー燃料の確保だけでなく、村内や近隣の病院の挨拶まわりなどをして、体調不良者を予想した受け入れ準備をしていた。だが、述べたように、翌19日には村の診療所に「考えられない人数の避難者」が押し寄せることになった<sup>33</sup>。

## 5.2 混乱からの出発(3月18日)

3月14日、避難者受け入れを決めた千明村長のもとに、片品村で地域づくり活動をしてきた村民から、「被災者を受け入れよう」という電話が入った。既に受け入れに向けて動いていることが伝えられると、その情報は村の中に広がっていった。新聞報道などで避難者受け入れが報じられると、「手助けしたい」、「ボランティアができれば」という声が移住者や高校生からあがった。地域づくりをしてきた村民の間に支援の機運が生まれた。メールを介して状況が共有され、村のボランティア組織「むらんていあ」が結成された。結いを意味する「むらんてい」と「ボランティア」を掛け合わせたのが「むらんていあ」である。

避難者が到着する3月18日、何をするか、具体的には決まっていなかったが、とにかく片品村に来た避難者を出迎えようということになった。卒業したばかりの高校生や移住者が歓迎の意を示そうと、「皆さんの安心を共に築きたいです」という横断幕を抱え、避難者を待った。バスが戸倉、岩鞍、片品、丸沼の4地区の宿泊施設に避難者を下ろすのは、早いバ

<sup>30</sup> 朝日新聞、2011年3月18日。

<sup>31</sup> 宿泊施設を避難所と見なしての避難者受け入れ方式は、マスメディアの報道やソーシャルメディアを介して広がり、他の市町村も同様の受け入れを検討しはじめた。この動きに追随するように、福島県は3月24日に仮設住宅が完成するまでの間、第2次避難施設として宿泊施設を利用する方針を打ち出した。4月1日以降は、避難者を受け入れる宿泊施設を「2次避難所」とする呼称が定着していく。

<sup>32</sup> 2011年7月10日、前出、千明村長へのヒアリングによる。

<sup>33</sup> 同上のヒアリングによる。

車で22時頃、遅いバスで24時頃だった。

到着したバスから降りる避難者に、出迎えた高校生らは、予想と違う受け入れの困難を感じるようになった。同じ年代の人が来るだろうと思っていたが、期せずして高齢者が多く、若い世代が少なかったからである。片品村が受け入れた避難者の約4割は65歳以上で、しかも70代以上の高齢者が約3割だった。特に、最後のバスが到着した戸倉地区は、高齢者が多かった。身体の不自由な人を乗せて一番はじめに出発したバスが、トイレ休憩などに時間がかかり、一番遅くに到着した。戸倉地区にはエレベーター付きの宿泊施設があり、結果として、3月11日以来の疲れが出て歩くのがやっとの、いわば災害弱者と呼ばれる高齢者を集団で受け入れるようになった。

それからが一騒動だった。到着早々に体調を崩した人のために救急車を呼び、「こんなところに来たくなかったんだ、歩いてでも帰る」という避難者に付き添って、まだ寒い雪の夜道を一緒に歩いた。予想外の出来事が頻発した受け入れ1日目だった。

### 5.3 「むらんていあ」の試行錯誤(3月19日~4月6日)

「むらんていあ」の事務所は、受け入れ翌日の19日に中央公民館に開設された。19日は土曜日、20日が日曜日、21日の月曜日は春分の日とあり、役場は3連休に入っていた。医療機関もほとんど休みだった。しかし、3月11日の震災、津波、原発事故による避難生活で、避難者は、精神的にも身体的にも疲労していた。19日には村の診療所に体調を悪化させた避難者が多数、押し寄せた。

混乱を避けるために避難者の健康調査を行い、片品村健康管理センターがその情報を集約し、医療機関と連絡をとりながら避難者を計画的に病院へと搬送することになった。「むらんていあ」は、健康調査票の配布や回収、各宿泊施設の通院希望者との連絡調整にあたった。また、バスで避難してきた人には医療機関に向く「足」がない。避難者を受け入れた宿泊施設は、地区ごとに団結して避難者の医療機関への送迎にあたったが、それでも対応しきれない避難者の送迎は「むらんていあ」が行った。

「むらんていあ」は特定の目的に特化して活動するのではなく、現場のニーズにあわせて活動を開始せざるを得なかった。「何をするか」を考えるまでもなかった。求められる活動は多岐にわたり、しかも即座に対応が求められるケースも多かった。はじめてのボランティア経験だったにもかかわらず臨機応変な対応ができたのは、日常生活の基盤である人間関係や地域づくり活動で育んできたネットワークがあり、春休み期間中に活動を担った高校生がおり、自分の仕事を休止して「むらんていあ」の活動に専心した移住者がいたからだ。 「むらんていあ通信」によれば、3月26日段階の主な活動は、次のようなものであった<sup>34</sup>。

<sup>34</sup> 「むらんていあ通信」<http://d.hatena.ne.jp/Mulunteer201103>(最終閲覧日 2011年7月1日)による。

- (1)被災地域への救援物資受付
- (2)南相馬市民への支援物資受付
- (3)健康管理センターへの事務処理支援
- (4)健康管理センターからの依頼による急病人の同伴搬送
- (5)村役場から南相馬市民の方への案内書類配布
- (6)片品むらんでいあのボランティア希望者の登録受付
- (7)支援業務の手配業務

ところで、片品村のボランティアは「むらんでいあ」だけではなかった。檜枝岐村でそうだったように、片品村にも村民という「ボランティア」がいた。避難者を受け入れた宿泊施設では、日常の会話を通して避難者の相談にのり、病院への通院の足を出し、「むらんでいあ」との連絡調整にあたった。加えて、「村の人たちの善意で自然発生的に昼食会や交流会が村のあちこちで開催」され<sup>35</sup>、片品村と南相馬市の人交流する場がつけられた。片品村の小学校に入学する子供たちのためにランドセルや式服、手縫いの袋を準備し、地元企業が就職説明会を開催した。

「むらんでいあ」は、こうした「村の人たちと、南相馬市の人とをつなぐ、潤滑油になれば」という思いで<sup>36</sup>、避難者に寄せられた支援物資の仕分けや各宿泊施設への配送、理容・美容師、マッサージ師などボランティア希望者のコーディネートに奔走した。

#### 5.4 ボランティアの方程式（4月7日～）

4月7日、千明村長は片品村に滞在希望する南相馬市の人を7月中旬まで受け入れることを公表した。村独自の受け入れから、2次避難所としての受け入れに性質を変えることになったのである。これにより、各宿泊施設に支払われる1泊3食の宿泊費も、制度的には2,500円から5,000円に引き上げが可能になった。だが、あくまで避難者支援であるという理念にこだわった片品村は、従来通り2,500円での受け入れを続けた<sup>37</sup>。

問題は宿泊施設であった。3月に受け入れていた宿泊施設のなかには、既に一般客・団体客の予約が入っているところもあった。村は7月いっぱいまでの受け入れが可能な宿泊施設を改めて募り、宿替えを行うことになった。宿の割り振りは片品村観光協会・片品村民宿旅館組合連合会が、地区ごとにある7つの宿泊組合の意向を確認しながらすすめた。宿替えはその後も何度か実施された。予約の都合で別の場所に移り、また戻ってくるというケースもあった。

<sup>35</sup> 同上、<http://d.hatena.ne.jp/Mulunteer201104>(最終閲覧日2011年7月1日)による。

<sup>36</sup> 2011年7月10日、「むらんでいあ」のMKさんへのヒアリングによる。

<sup>37</sup> これは損得勘定抜きで避難者を避難してきた片品村のこだわりでもあった。金銭には代えられない志の表明と言い換えても良い。ただし、長期受入れに伴い、宿泊施設側の疲労が増しているのも事実であったから、かわりに昼食の弁当を700円で手配し、配布することで、3食提供してきた宿の負担軽減をはかった。

4月24日には、南相馬市への一時帰宅のバスが出た。片品村に避難してきたのは、20km圏内の住民もいるが、多くは福島第一原発20km～30kmに住んでいる住民である。こうした人々は、地震と津波で家屋に大きな被害がなければ屋内退避区域にある自宅に戻ることも可能だった。だが、バスで集団避難してきたため足がなく、なかなか戻れないという状況があった。南相馬市が実施した一時帰宅では、1世帯につき1人、総計171人がバス4台に分乗して、1泊2日の予定で帰宅した。うち、83人は南相馬市に帰宅することを決意して片品村を出た。片品村に戻ってくるつもりだったが、一時帰宅後に南相馬市に戻ることにした人もいた<sup>38</sup>。

日々、変化する状況に「むらんでいあ」は、ボランティアや支援物資の受け付けを中断し、長期受け入れに合わせた活動を開始する。南相馬市の人々の「たまり場」をつくり、宿泊施設のある各地域とを結ぶ「足」になるマイクロバスを走らせたのである。

たまり場は南相馬の方言で、「さあ、おあがりなさい」を意味する「じえじえ・あがっせ」と名づけられた。バスは相馬野馬追祭の「まいれー（参れ）」という掛け声から、「まいれ一号」と名づけられた。たまり場の運営スタッフやバスの運転手には、南相馬市の人を雇用した。被災者の自立のための群馬県緊急雇用対策事業を活用し、「じえじえ・あがっせ」と「まいれ一号」を、避難者の経済的自立のための雇用創出に結び付けたのである。「じえじえ・あがっせ」は、村外のボランティア希望者が活動できる場所としても機能し、「むらんでいあ」にかかっていたボランティアコーディネートの負担は軽減された。「じえじえ・あがっせ」では、さまざまなイベントやツアーが開催され、単調になりがちな避難生活に楽しみをもたらした。

「南相馬の方々×片品村の方々×村外の方々＝南相馬の方々を元気にする。」

4月7日以降、たびたび「むらんでいあ通信」に掲げられたこの方程式には、懸命に走り続けるなかで「むらんでいあ」が感覚的につかみ取った思想が凝縮されている。この解は、「じえじえ・あがっせ」の開設で明確になった。最大の支援は避難者の自立支援である。そして、南相馬の人々、片品村の人々、そして村外ボランティアがうまく連携して歯車を回すことができたときに、避難者が自立し、本当の意味で元気を取り戻すことができるのである。

## 5.5 支援の場から自立の場へ

とはいえ、避難者雇用にあたっては、ミスマッチもあった。2011年6月9日付け読売新聞は次のように報じている。

<sup>38</sup> 逆に、片品村に自家用車を持ってきて、引き続き滞在する人もいた。

「東日本大震災で群馬県内に避難している住民のうち、国の緊急雇用創出基金を活用して雇用されたのは14人とどまっていることが8日、県議会雇用対策特別委員会で報告された。

県は、同基金による300人分の雇用創出を目指し、今年度一般会計補正予算案に5億2000万円を計上。県労働政策課によると、求人はすでに219人分、集まっている。

それに対し、実際に就労したのは、嬭恋村のキャベツ収穫作業が2人（募集50人）、太田市の臨時職員が3人（同8人）。同課が「避難先から近く、人気が高かった」とする片品村での避難所関係の仕事も9人（同18人）にとどまっている。」

緊急雇用対策事業を活用して「むらんでいあ」で働く人が出てきたとはいえ、より多くの人働き、生活資金を得るような状況にはまだ遠い。片品村に来た南相馬市の人たちは、もともと高齢者が多い。小さな子供を抱えている女性は働くのが難しい。積極的に生活再建を考える人は「戻る＝片品村を出る」ことを選択していく。他方で、先行きがみえない避難者は、自立のためのステップに踏み出すことに躊躇する。

そうしたなかで、「片品村に滞在している方の多くは、年配の方が多く、その方にも働く意欲と喜びをもっていただきたい」という思いから、「むらんでいあ」は「心の箸袋プロジェクト」を開始した（写真3）。

和紙を折り、押し葉をあしらった箸袋に、「こころの住民証」<sup>39</sup>を記したしおりを入れる。「むらんでいあ」の活動資金として寄せられた義捐金を用い、作業は南相馬市の人に有償で行ってもらう。こうして作られる「心の箸袋」は、南相馬市の人々の自立のための作業であると同時に、宿泊施設をはじめ、村内外で支援してくれた多くの人に感謝の気持ちを伝える手段となる。檜枝岐村の事例でみたような双方向的ボランティアが成立しにくい関係性であっても、「心の箸袋」を媒介にして、互いの「思い」をキャッチボールすることができる。「心の箸袋プロジェクト」は、そのような意味において、画期的な取り組みであった。

避難から4カ月を経過した7月には、片品村に滞在する避難者の数も200人余りとなった。積極的に自立を模索しようとする人々は、次々に片品村を離れ、南相馬市に戻っていた。片品村に仕事をみつけ、片品村に根付くことを選んだ人々も、二次避難所である宿泊施設を離れ、自立した生活の場を確保しはじめた。「じぇじぇ・あがっせ」は、避難者の「たまり場」から、自立のための「心の箸袋プロジェクト」の作業所的な役割に移行し始めた。また、南相馬市の人々の片品村への感謝の気持ち、恩がえしがしたいという気持ちを

<sup>39</sup> 「うれしいことがあったとき、帰っておいで片品にくやしいことがあったとき、帰っておいで片品にかなしいことがあったとき、帰っておいで片品にたのしいことがあったとき、帰っておいで片品にみんなまとめて帰っておいであなたのふる里『片品』へ。

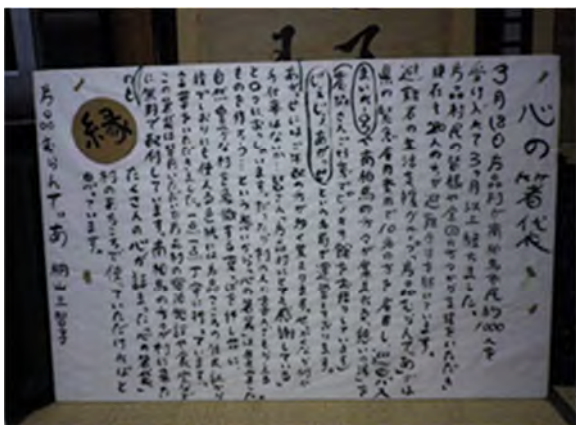


写真3 「心の箸袋」に込めた思い  
出典：関礼子撮影

「恩返し隊」の活動とし、草刈りや清掃作業を有償で行ってもらおうという試みもなされた。

8月30日、片品村から南相馬市へ向かう最後のバスが出た。片品村で新しい生活をはじめた13人と、延長して滞在を希望する人を除き、ほとんどすべての人が片品村を後にした。8月31日の「むらんでいあ通信」

は、次のように記している<sup>40</sup>。

「昨日、南相馬への最後の帰宅バスが出発しました。やっと帰宅できるとの思いと、原発の問題や震災後の生活の問題など、先が見えない中で帰宅する方を見送るのは、辛いものです。また、この活動を通して知り合った方々だけに、お別れがなごり惜しい限りです。

私達と一緒に働き、『こころの箸袋』の葉っぱ担当の方も昨日帰宅しました。帰宅後生活の拠点をはっきりしていない状況での帰宅でしたが、南相馬に到着して早々市役所から連絡があり、仮設に入居できるようになったと、喜びの報告がありました。それを聞き、私達もほっとしました。

これから南相馬に戻り、復興に向けての生活が始まります。

片品村での思い出を糧に前向きに生活していただくことを願っています。」

## 6. 片品村における観光と「ボランティア」

東日本大震災は、片品村の観光に大きな影響を与えた。3月はまだ春スキーの時期だったが、かたしな高原スキー場をはじめ、各スキー場は営業を終了し、日帰り温泉を併設した尾瀬の自然保護の啓発の場「尾瀬ぷらり館」も臨時休業になった。宿泊施設の予約はキャンセルが相次いだ。ガソリンをはじめとした物資の不足と分限のある消費行動の推奨、福島原発事故による電力不足（実際には、火力発電所の停止などのダメージが大きかった）による計画停電の実施と節電要請など、自粛ムードが日本全体を覆っており、とても通常営業できる状態ではなかった。

とはいえ、南相馬市からの避難者を受け入れることは、観光客を受け入れるのとは勝手が違う。では、多数の避難者を受け入れた片品村の宿泊施設と避難者との関係はどのよう

<sup>40</sup> 「むらんでいあ通信」<http://d.hatena.ne.jp/Mulunteer201108>(最終閲覧日 2011年9月30日)による。

なものだったのか。

### 6.1 避難者受け入れ状況の推移

1村1集落で、集落の端から端まで歩いて30分の檜枝岐村に対し、片品村の集落は複数ある。受け入れにあたったのは、最終的には村の中心部の片品地区、山の谷に沿った戸倉、岩鞍、丸沼、武尊の計5地区になった。図3は、3月18日から7月10日までの各地区の受け入れ人数を示している。受け入れ人数はほぼ一直線に漸減していくが、述べたように、4月24日の一時帰宅後と、7月7日の南相馬へ帰宅バスが出たときに、人数が大きく減っていることが確認できる。

地区別受け入れ人数には、より大きな変動があった。3月18日に受け入れゼロだった武尊地区は、3月23日から受け入れをスタートしている。3月18日に最大数を受け入れた戸倉地区は、高齢者や体調不良の人を多く受け入れたが、途中、受け入れがゼロになり、かわりに岩鞍地区の受け入れ人数が激増する。

避難者の居住地別にみた傾向は、図4のようになっている。いずれの地域も津波による被害があったが、3月18日時点と7月10日時点と比較すると、南相馬市原町区と鹿島区の避難者の減少幅が大きく、双葉町の2人を除くと、福島第1原発から20km圏内にある南相馬市小高区や浪江町は減少幅が小さい。原発事故が避難者の滞在状況に影響を与えていることが予測できる。

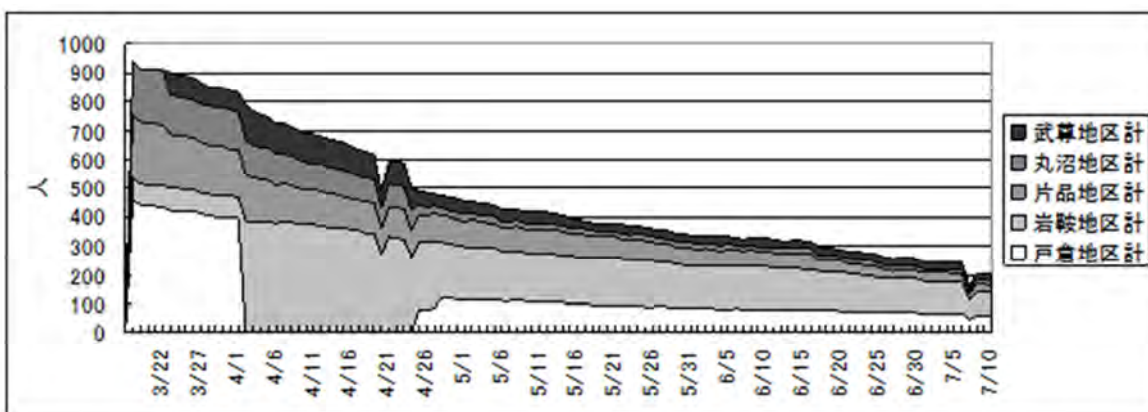


図3 片品村5地区の避難者受け入れ人数の推移（受け入れから7月10日迄）

出典：片品村資料より作成。

注1：宿泊者ベースの人数である。

注2：7月10日段階で退宿者723人、その他（外泊、入院など）43人となっている。

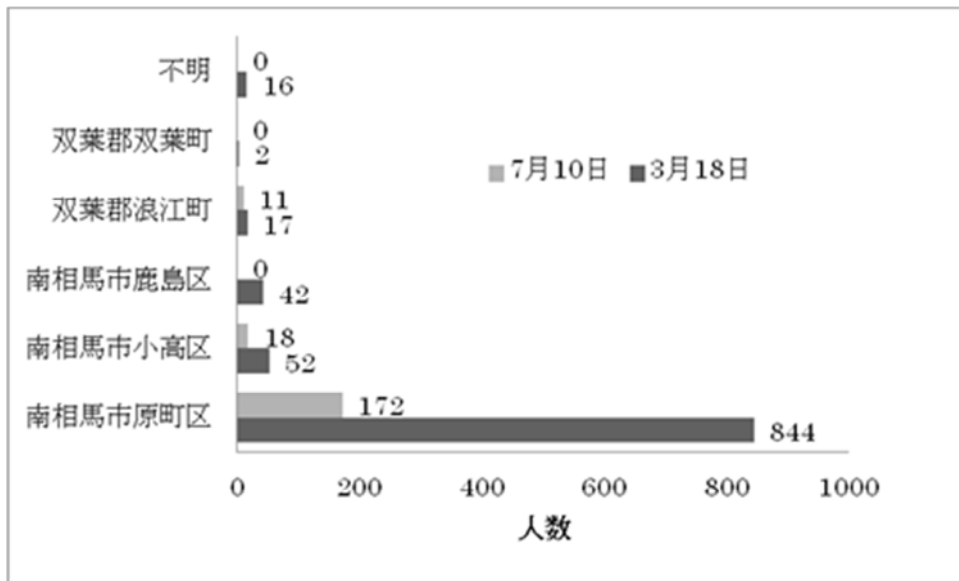


図4 住所別にみた避難者人数の変化  
 出典：片品村資料から作成。  
 注：宿泊者ベースの人数である。

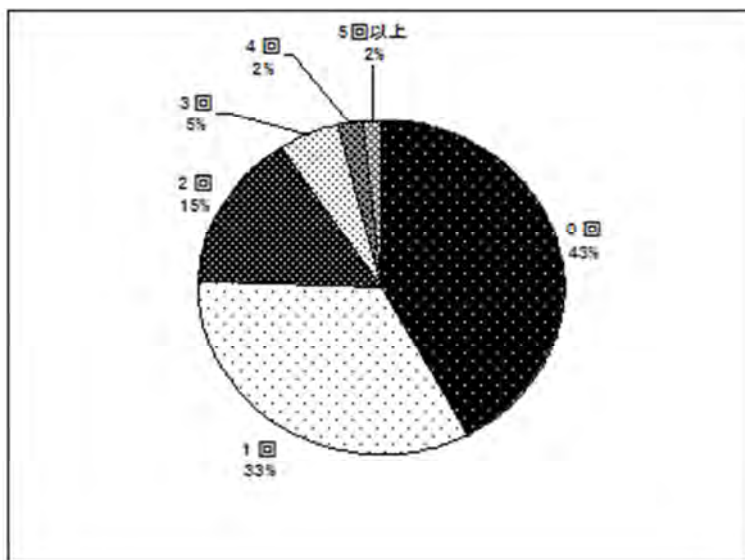


図5 片品村滞在中の宿泊施設移転回数  
 出典：片品村資料より作成。  
 注：宿泊者ベースの人数である。



図5は避難者が片品村滞在中に経験した宿替えの回数を示している。滞在日数の長短などがあるため単純比較できないが、大部分は宿替えを経験していない(43%)か、1回(33%)～2回(15%)である。当然ではあるが、4月はじめの大規模な宿替えを経験する前に戻って行った人がここに含まれる。

残り9%は3回以上で、最多で6回という人もいた。長期滞在者に移転回数が多いということは予測しうるし、実際にそういう人がいる。だが、4月から5月に退宿した避難者でも5回、6回の移転を経験しており、滞在期間の長短と移転回数は必ずしも相関していない。

## 6.2 受け入れ地域の試行錯誤

エレベーターを備えた宿泊施設がある地区には足の不自由な人や体調の悪い人が多く滞在中、就学中の子供を持つ家族は徒歩で通える範囲の宿泊施設に滞在するなど、配宿には避難者にあわせた配慮がなされた。そのため、受け入れ地区ごとに避難者の属性は異なっている。また、同じ地区であっても、従業員を雇用する大きな宿泊施設もあれば、基本的に家族経営の宿泊施設もあるから、宿泊施設の避難者受け入れの経験は決して一様ではない。

### (1) 戸倉地区の宿泊施設の事例

片品村は尾瀬の玄関口であるが、なかでも戸倉地区は大清水や鳩待峠を経て尾瀬に至る正面玄関である。新幹線の上毛高原駅、在来線の沼田駅からアクセスするバスがあり、夏季には東京方面からも直通の夜行バスが出ている。戸倉地区は、尾瀬の観光客で最も賑わう地区である。冬季は、雪質が良いスキー場を目指して大勢のスキー客が訪れる。

また、戸倉地区は、スポーツ合宿の受け入れにも力を入れてきた。地区にはテニスコートやサッカーグラウンド、野球場、体育館が整備されており、尾瀬戸倉温泉が管理する施設のほか、宿泊施設が私有する施設がある。音楽合宿の受け入れに特化した設備をもつ宿泊施設もあり、通年型観光地となっている。片品村のなかでも東京電力との関係が強いという特徴もある。東京電力グループの尾瀬林業尾瀬戸倉支社があり、尾瀬林業は山小屋を経営し、尾瀬の保護や環境教育の推進に力を入れてきた企業として有名である。さて、3月は、例年ならばまだスキー客でにぎわう時期であるが、震災後は予約のキャンセルが相次ぎ、スキー場自体も閉鎖した。戸倉地区では、南相馬市からの避難者受け入れにあたって、宿泊ベースで935人のうち、約半数にあたる456人も人数を受け入れた(図6)<sup>41</sup>。うち、100人以上を受け入れた宿泊施設が1軒、10人から40人を受け入れた宿泊施設が17軒あった。大規模な宿替えが実施された後の4月2日から受け入れ数が地区全体で0人となったが、その後、4月25日には再度80人を受け入れている。

<sup>41</sup> 以下の数字は宿泊者ベースで示している。

避難者は病気や体調不良の高齢者が多く、戸倉地区では、病院へ行き来するためにマイクローバスを出して対応したが、「最初に受け入れた宿は3月中、ずっと大変だった」<sup>42</sup>。燃料不足の折で、各宿泊施設では暖房のための灯油確保に頭を悩ませた。合宿の受け入れで3食つくるのには慣れているとはいえ、長期の受け入れで家族経営の宿は外出もままならない。当初は、予約客のキャンセル分の食材があったが、3食2,500円で対応するには宿泊人数が多くなるとは難しいという事情もあった。他方で、片品村は4月からの長期受け入れに際し、一つの宿泊施設に多くても20人か30人にして欲しいという意向を示した<sup>43</sup>。戸倉

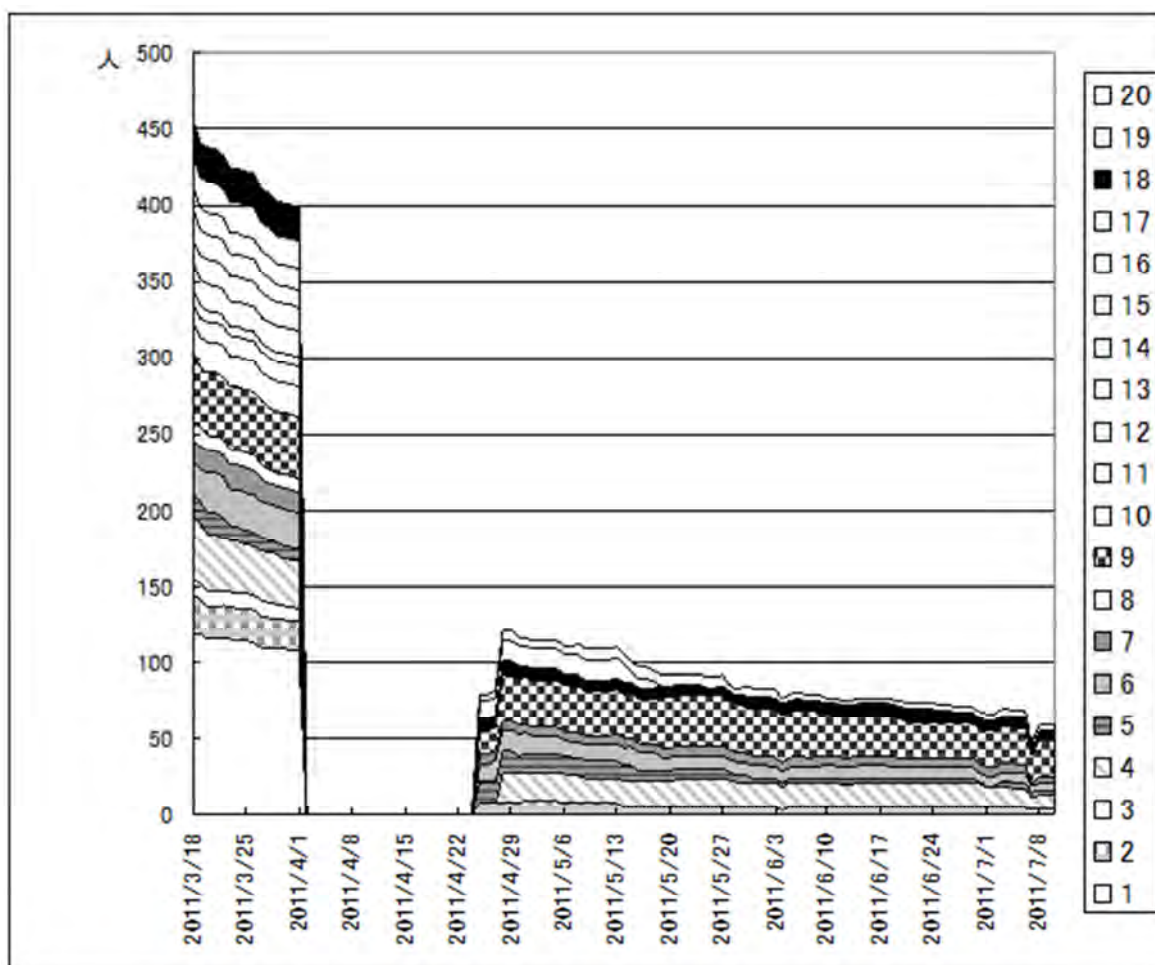


図6 戸倉地区の避難者受け入れ状況

出典：片品村資料から作成。

注1：宿泊者ベースの人数である。

注2：1～20は避難者を受け入れた個々の宿泊施設を示す番号である

注3：3月のみ避難者を受け入れた宿、4月25日以降にはじめて受け入れた宿は、すべて白色で示している。

<sup>42</sup> 2011年7月11日、戸倉地区の旅館K1オーナーへのヒアリングによる。なお、宿泊施設の番号は図表中の宿泊施設番号とは関係しない。以下も同様である。

<sup>43</sup> 2011年7月11日、片品村役場へのヒアリングによる。

地区はこの条件では地区として受け入れが難しいと判断し、4月は受け入れを地区全体で一時的、中断した<sup>44</sup>。4月25日からは、3月中に受け入れた18の宿泊施設うち7軒と、新たに受け入れを開始した2軒で避難者受け入れを再開した。

## (2)岩鞍地区の宿泊施設の事例

当初、岩鞍地区で避難者を受け入れは、ホテルK2の81人のみだった。だが、4月2日には新たに14の宿泊施設が受け入れを開始し、地区総計で386人を受け入れた。戸倉地区から出た避難者の大部分を吸収する人数の受け入れである。ここから、ホテルK2の受け入れ状況が、岩鞍地区の避難者受け入れに何らかの影響を与えたのではないかと推測できる。では、ホテルK2は、避難者の受け入れにあたって、どのような対応をしたのだろうか<sup>45</sup>。

ホテルK2は、もともとホテルの寮として建設・利用し、現在は宿泊施設として利用している別棟のK2ハウスを避難者に用意した。3月18日に受け入れた81人は、K2ハウスのツインルーム40室に収容できる最大限の人数であった。ホテルK2は、震災から1週間たって疲労もピークに達しているだろうと配慮し、最初の1日、2日はスタッフで食事を用意し、通常のお客さんと同じようなサービスでもてなした。

しかし、スタッフに余裕はない。「最初はどのようにしていいのかわからないが、長期戦になると思った」ホテルK2は、避難者はやることもなく暇を持て余すので、「仕事を見つけてあげるのも手助け」になるのではないかと考えた。そこで、「みなさんは避難しているのであって、私たちは皆さんの避難生活のお手伝いをします」と話をし、3日後には食事の支度や掃除で手伝いができる人を避難者から募った。こうして早い時期から避難者の自治を促し、「避難者をサポートする側にスタッフを回した」のである。

たとえば、食事は調理長が毎日のメニューを決め、仕入れをする。食事の支度や後片付けは、できるだけ避難者に任せる。「削れるところは極力削って」、避難者の「自主管理に」委ねた運営を行ったのである。と言っても、不自由を強いているわけではない。エレベーターがあるK2ハウスには、結果的に足が不自由な人が多く集まったため、部屋についている洋式トイレやユニットバスは自由に使用してもらっている。加えて、社長が「温泉も自由にに入れてあげなさい」という意向であったため、ホテルK2にある温泉も解放してきた<sup>46</sup>。「削れるところ」とは、スタッフがサービスをするのではなく、生活サポートに回るとい

---

<sup>44</sup> ただし、戸倉地区の宿泊施設では、既にコミュニティが形成されているところもあり、「出たくない」という避難者や「出たくない」という宿泊施設もあった（2011年11月6日、三人委員会片品哲学塾2011での関係者の発言より）。会津若松市周辺で避難者受け入れにあたった温泉地でのヒアリング（2011年7月2日）でも、規模の大きな宿泊施設は特に、電気代や暖房費だけでなく、人件費の捻出を考えると、少人数の受け入れでは採算割れの懸念があるという話を聞いた。

<sup>45</sup> 以下は、2011年7月10日、ホテルK2での支配人へのヒアリングによる。

<sup>46</sup> 温泉の解放は、避難者から「もったいないから、いいです」と言われてから、毎日ではなく、時々解放する方式に変えた。

うことを意味しているにすぎないようである<sup>47</sup>。

ホテル K2 の支配人は、朝に出勤すると K2 ハウスに顔を出す。K2 ハウスは従業員食堂も兼ねているので、従業員が食事をしに行く。こうした関係性もあるからか、「K2 ハウスから他の宿に移るなら、南相馬に戻る」という人もいる。

K2ハウスでは避難者が自発的に玄関の雪かきをし、ホテルのスキー場やユリ園の仕事(リングを掘りだす作業、球根の植え付け作業など)もボランティアで手伝ってくれていた。その様子に「できれば、アルバイトとしてでも使いたい」と考え、実際に1人アルバイト

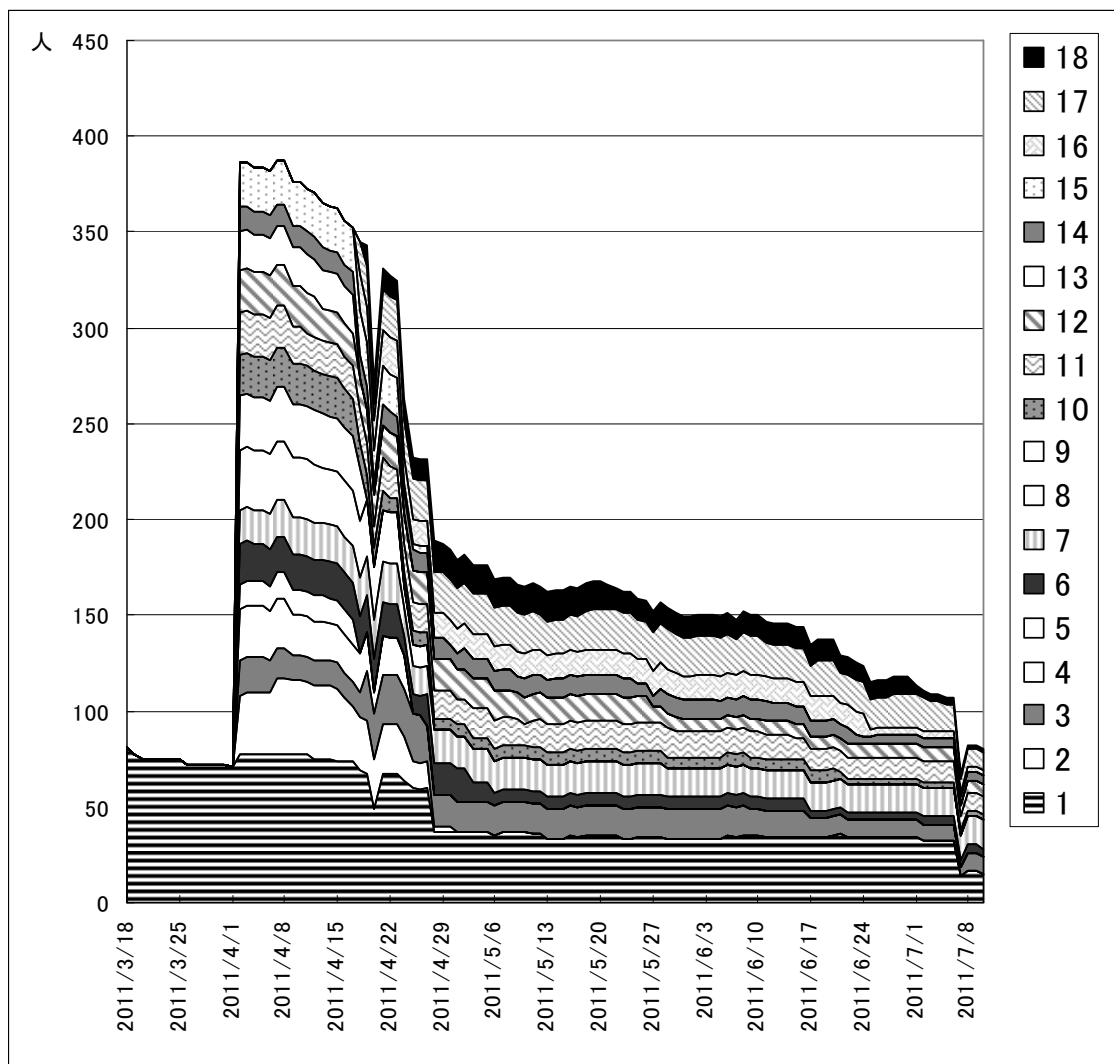


図7 岩鞍地区の避難者受け入れ状況

出典：片品村資料から作成。

注1：宿泊者ベースの人数である。

注2：1～18は避難者を受け入れた個々の宿泊施設を示す番号である。

注3：4月24日の一時帰宅後に宿泊者数が激減し、受け入れ数が0になった宿はすべて白色で示している。

<sup>47</sup> 病院の送迎に関しては、当初、岩鞍地区では尾瀬岩鞍高原旅館組合が送迎のバスを出した。

で厨房を手伝ってもらうようになった。

こうした受け入れのノウハウは、片品村民宿旅館組合連合会の事務局でもある片品村観光協会が、後続して受け入れる各宿泊施設に教えたという。ホテル K2 の近くにあるロッジ K3 を訪れると、女性 2 人が厨房にいた。経営者が用事で留守にしているので昼食の準備をしているのだという<sup>48</sup>。「宿の人にもみんな南相馬の味に慣れさせた」、「ふきかりんとうを作って片品村の『ふれあいバザール』に出したら好評だった」と語る 2 人は、南相馬市に戻るまでロッジ K3 にいたいと希望している。「宿替えがあると、せっかく仲良くなっても離れてしまうし、掃除でも何でも勝手が違って、覚えるのに時間がかかるでしょう。やっとなると覚えると宿替えで始めから覚え直しになるから」である。

厨房に避難者が入ることを良しとし、仕事を分担できる関係性＝大きな家族のような関係性が、ここでも成立していた。ホテル K2 で聞いた「仕事を見つけてあげるのも手助け」、「避難生活のお手伝い」という関係性が、ロッジ K3 でも自然な形で成立していた。

### (3)武尊地区の宿泊施設の事例

3 月 23 日から避難者を受け入れた武尊地域は、宿泊施設の公平性を保つために、4 月下旬頃までに頻りに宿替えがあった地域である。宿替えは、食事メニューに変化を期待できる、気分転換になるなどのメリットが考えられる。

実際、近年は、近接する場所にある姉妹ホテルで食事や温泉を楽しむプラン、1 泊ずつ姉妹ホテルを泊まり歩くプランを提供しているホテルや旅行代理店がある。宿を替えるのは非日常を楽しむ旅の醍醐味であるが、非日常が日常化するという異常な事態にある避難者からすれば、宿替えは必ずしも好ましくなかった。ロッジ K3 の避難者女性が語ってくれたように、生活者として宿泊施設で主体的に動くことの妨げになるからである。また、避難者と宿、避難者と避難者とが人間関係を結び、一時的にせよ、擬似的にせよ、コミュニティが形成されると、宿替えはストレスになる<sup>49</sup>。

4 月 25 日から避難者を受け入れたペンション K4 は、チェストを購入して備え付けるなどの「部屋づくり」をし、パソコンを使う人のためにフリー・スポットを設けた。受け入れた避難者は各宿を転々としていた。ペンション K4 は、やってきた避難者にはじめに「病気はないですか」と声をかけた<sup>50</sup>。4 人家族 1 世帯、1 人世帯 3 人の計 7 人のうち、5 人は病院に通院していた。ペンション K4 では、オーナーが通院する人の送り迎えに対応した。健康管理センターなどを通すなどして「むらんていあ」に送迎ボランティアをお願いできたが、一度、連絡の行き違いがあり、自分で対応するのが確実だと考えたからである。

高血圧の人、偏食がある人もいたが、食事に気を配り、肉・魚を欠かさず、野菜もたっ

<sup>48</sup> 2011 年 7 月 10 日、ロッジ K3 での避難者へのヒアリングによる。

<sup>49</sup> もちろん、うまくコミュニティを作れなかった場合には、宿替えがコミュニティ形成のチャンスになる。

<sup>50</sup> 以下は、2011 年 7 月 11 日、ペンション K4 でのオーナーへのヒアリングによる。ただし、カッコ内は筆者挿入。

ぷりの和食を心がけると、「この辺りでも奇跡だと評判になるくらい」避難者の体調も良くなってきた。「むらんでいあ」からはたくさんのイベント案内があるが、肝心の尾瀬を見てもらう暇がないと、尾瀬に行く機会も設けた。避難者もハーブを摘む手伝いをし、米を買ってくる、味噌をつくる、外出したときにはお土産を持って来るなど、宿を気遣ってくれたという。

ペンション K4 のオーナーは、長期間の受け入れは大変だが、「日数を数えてはいけない、これを日常と思わなければいけない」と語り、他方で、「宿への支援が必要ではないか」と

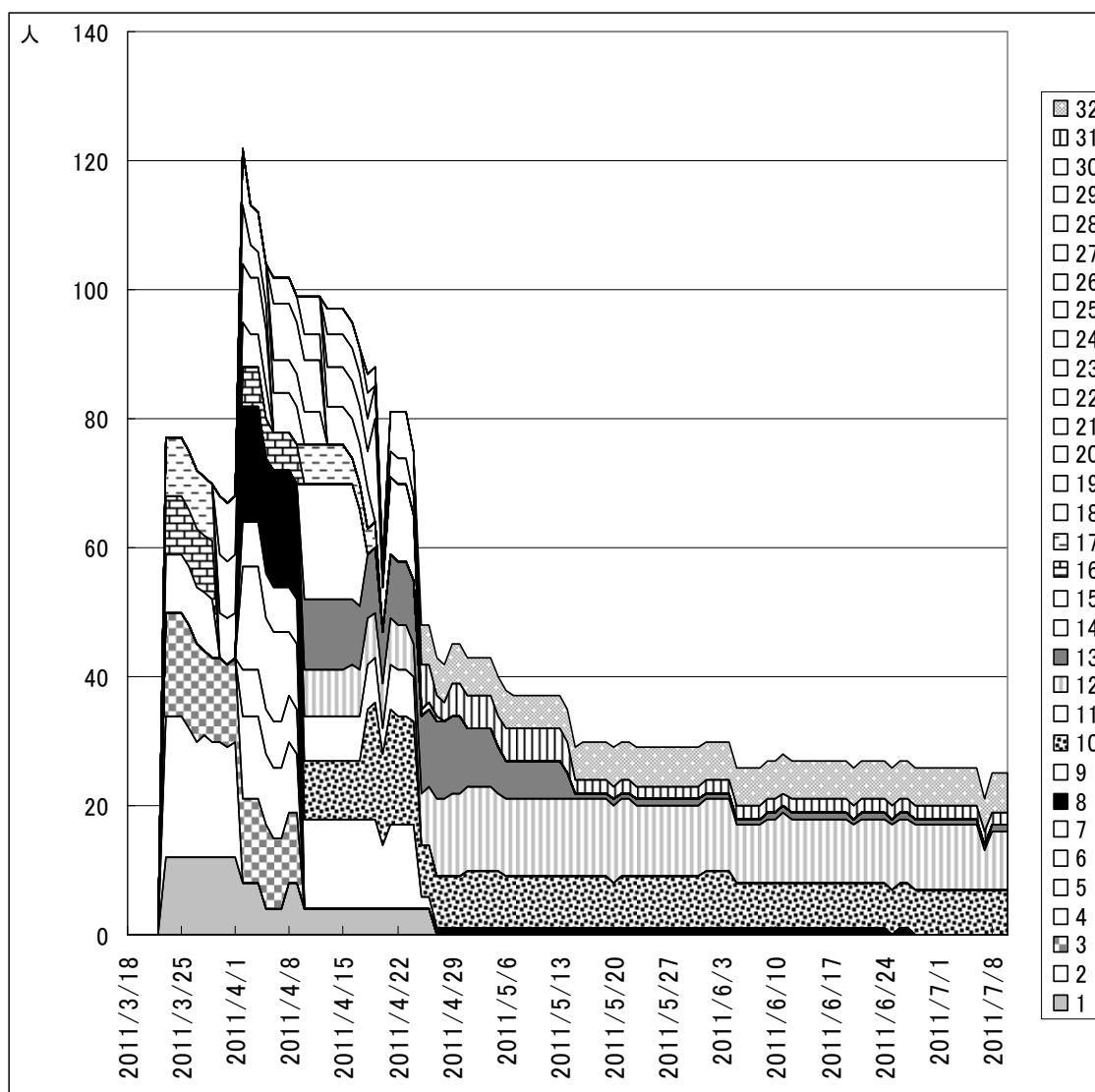


図8 武尊地区の避難者受け入れ状況

出典：片品村資料から作成。

注1：宿泊者ベースの人数である。

注2：1～32は、避難者を受け入れた個々の宿泊施設を示す番号である。

注3：比較的まとまった人数を連続して受け入れている宿以外は白色で示している。

もいう。食料の支援を含め、「本来は、村をどうにかしようとしている人（避難者受け入れに協力している宿泊施設）」への支援のあり方を考えることが必要ではないかと考えているのである。ペンション K4 では避難者同士でトラブルがない。だが、避難者同士、気が合う、気が合わないでトラブルが生じることもある。仕方ないことだが、避難のストレスを周囲にぶつける人もいる。宿泊施設は、そうしたトラブルに対処せざるを得ない。避難者を受け入れた宿泊施設に対する後方支援は、そうした意味においても必要性が高かっただろう。

ペンション K4 が 6 回目の移動になるという C さんは、両親と姉の 4 人家族である<sup>51</sup>。だが、姉は既に原町区に戻っていた。病気を患っており、思い通りにならないと大声を出すなど、避難生活を送るのが難しかったのだという。

C さんは、ペンション K4 に移るときに、後は宿替えがないと聞き「精神的に楽になった」、「やっと落ち着くことができた」という。また、「家族であっても、ひとりひとり、生活スタイルが違う」から、同じ部屋では落ち着かない。ペンション K4 では、両親と別部屋にしてくれた。そのため、「個室をもらって楽になれた」と C さんはいう。

両親は週に 2、3 回は「じぇじぇ、あがっせ」に行き、イベントにも参加している。バスが迎えに来てくれるので自由に行けるのが良い。だが、「なかには観光的な気分で宿の文句を言っている人もいる。そういう人がいるところは、結構、困っているようだ」と片品村の宿の声を代弁した。「人はそれぞれだが、目くじらたてずに、うまくやっていければいいのに」、と。

## 7. 尾瀬の村の「地域力」という「減災力」

宿泊施設で避難者を受け入れるという試みは、どこにもマニュアルのない、はじめての試みである。避難してくる人を受け入れた檜枝岐村の試みも、避難が必要な人を呼び寄せた片品村の試みも、大胆かつ先進的なものであったことに疑いはない。

だが、自力で避難しえた人や学習教育支援で避難者を受け入れた檜枝岐村と、自力で避難できなかった人を受け入れた片品村とでは、受け入れ経験が異なってくる。「村を守るため」に「村外者に土地を手放さない」という申し合わせをし<sup>52</sup>、独自の伝統や文化を守り育んできた檜枝岐村と<sup>53</sup>、村を村外者にも開き、I ターン者を受け入れながら積極的に地域づくりをしてきた片品村とでは、地域の基層にある思想も異なる。

共通点があるとすれば、どちらも市町村合併せずに今日に至っているという点である。檜枝岐村は近世以来、片品村は 1889 年の町制施行以来、一貫して独自の自治を貫いてきた。小規模自治体であればあるほど行政と住民との距離は近く、住民の自治力も高い。そうで

<sup>51</sup> 2011 年 7 月 11 日、S さん（南相馬市原町区、1963 年生まれ）へのヒアリングによる。

<sup>52</sup> 檜枝岐村公民館 1990『檜枝岐村公民館報 檜枝岐』第 87 号（5 月 31 日発行）、5 頁。

<sup>53</sup> 檜枝岐村では、訪れて去っていく避難者を淡々と受け入れできたが、避難者受け入れについてさほど饒舌ではない。

なければ、即座に独自の支援体制を打ち立てることは困難だったであろう<sup>54</sup>。その意味で、この2つの村が避難者受け入れで発揮した「減災力」は、かたちを変えた「地域力」である。

尾瀬をはさんだ2つの村の避難者受け入れの減災効果の大きさは、4月になって、各観光地・温泉地が「2次避難所」として指定されていく状況を見ても明らかである。今後、大規模災害が生じた時、特に都市部が被災したときには、想定されている避難所では収容しきれない被災者が生まれることが予測され、2次避難所の開設が有力な選択肢となることも考えられる。では、尾瀬の村から今後に向けて、どのようなメッセージが読み取れるだろうか。

### 7.1 自治体間交流

第1は、自治体間での「顔の見える関係」が、災害時の緊急支援を円滑にしたということである。檜枝岐村が大熊町の子供たちを学習教育支援という名目で受け入れたのは、大熊町の教育長から「子供たちをどうかしたい」という相談が檜枝岐村にあったからである。他の自治体でも、たとえば旧新鶴村時代から檜葉町と姉妹都市協定、災害時の相互応援協定を結んでいた会津美里町が、檜葉町の役場機能移転と避難者受け入れに尽力したように、自治体間交流は減災効果を発揮した。片品村は尾瀬を通して福島県と関係が深く、相互の交流の場があったことから、福島県の避難者支援をしようと考えた<sup>55</sup>。

### 7.2 ボランティアのあり方

第2は、ボランティアのあり方についてである。檜枝岐村と片品村の村長が決断した避難者受け入れのための予算措置は、村民の賛同を得られる見通しがなければ難しい。したがって、2つの村が実施した独自の施策は、村自体がひとつのボランティア組織として機能した結果とみることもできる。

片品村の場合、村のボランティア団体として「むらんていあ」が組織され、村外のボランティアの受け付け、調整する役割を担った。東日本大震災の被災地では、各地でボランティアの受付だけで社会福祉協議会の窓口がパンクするという事態が報じられたが、「むらんていあ」はボランティアの受け付けという大仕事をやり遂げた。避難者支援で最も重要な病院への搬送などに対応できる人材が不足するなど、ボランティアのミスマッチがあったが、「むらんていあ」はそうした状況にも対応してきた。地域で育ててきた人間関係とネットワークがうまく機能した成功例であろう。

### 7.3 支援物資の届け方

<sup>54</sup> ちなみに、檜枝岐村の2009年財政力指数は0.52で全国807位、片品村は0.27で全国1361位であり、財政が豊かであれば独創的な支援が可能だとは必ずしもいえないようである。

<sup>55</sup> この決断は、檜枝岐村長にも直接、電話で伝えられていた（前出、2011年10月31日、星光祥檜枝岐村長へのヒアリングによる）。



さらに、善意の支援物資も仕分けの手が足りず、肝心の被災者のもとに届かない。大量に物資が滞るという状況も繰り返し報じられてきた。片品村にも多くの支援物資が届けられ、「むらていあ」が仕分けと配送作業にあたってきたが、送られてくる支援物資と避難者のニーズにタイムラグが生じることもあった。生鮮食品など、すぐに配送が必要な支援物資が突然に寄せられ、対応に苦慮しつつ奔走したこともあった。「日常生活は宿の方がサポートしてくれるし、被災地の避難所とは違うということがなかなか理解されない」という悩みもあった<sup>56</sup>。

ここから導き出される課題は、当該地域で避難者支援をしている自治体やボランティアを後方支援するような支援やボランティアのあり方についてである。たとえば、片品村で、最も「むらていあ」スタッフの印象に残っている支援物資の提供は、現地に足を運び、「必要であれば」靴を提供すると申し出てくれた S 社のケースである。「むらていあ」が避難者の希望する靴の種類とサイズを示したところ、S 社は南相馬市への一時帰宅の日程にあわせ、仕分けに手間のかからないような配慮をして届けてくれた<sup>57</sup>。ここから、物資の提供という善意を現地が受け止めることが可能かどうかを直接に現地で確認すること、善意を避難者につないでくれるボランティア（または自治体職員）への配慮の必要性が示唆される。

#### 7.4 新しい後方支援のかたち

「むらていあ」は、片品村が地域づくりの過程で育んできた人間関係のなかから生まれた組織である。そして、「むらていあ」の活動を資金的に支援したのも、地域づくりの過程で育まれた人間関係である。地道な地域づくりをしてきた片品村では、2007 年から毎年、「哲学塾」を開催してきた。哲学塾とは、地域と人間との関係性を軸に、ローカルで多元性ある新しい思想潮流を生みだそうと試みる内山節（哲学）・大熊孝（河川工学）・鬼頭秀一（環境倫理）と、その試みに共鳴する人々が、膝を交えて討論する場である。その関係性のなかで、「片品村の福島原発事故避難者受入のための義援金基金創設について」呼びかけがなされ、集まった基金が「むらていあ」に送られた。

『片品らしい』とも思えるところも含めて、まさに、『むらていあ』の言葉の通り、『ムラのひと』の延長線上に、同じ目線で、対等な形で、一つの家族としてつきあって行こうとする姿は、そのことを、高校生のような若い人たちの創意工夫の中でなされてきたことも含めて、日本の社会がこれからすすむべき一つの形を見たような気がしています。

<sup>56</sup> 前出、2011 年 7 月 10 日、MK さんへのヒアリングによる。

<sup>57</sup> 「支援していただける物資を送っていただいたり、ボランティアの申し出を数多くいただき誠にありがたく思っております。しかし、片品村の特殊事情で、宿が 45 カ所に別れている為、配布方法やボランティアの活動をしていただく宿を指定したり、一カ所で一度に通知できない事情があり大変なのですが、その事情を確認されず一方的にお申し出されることがあるのですが、(中略) ご自身で片品村の状況やニーズを把握して、行動していただいたことは、『片品むらていあ』にとって大変助かりました」(「むらていあ通信」<http://d.hatena.ne.jp/Mulunteer201104>、(最終閲覧日 2011 年 9 月 20 日)による)。

今後、いろんな意味で見守っていきたいと考えています(中略)。画期的なのは、南相馬市の方が『片品むらんでいあ』の運営にも中心的な役割をされつつあることです。当初から、南相馬市から避難されてきた方を、この地域で自立して生活できるような形で『猫の手』的にお手伝いしたいと考えられてきたことの一つの帰結だと思います。『大きな家族と小さな自治』の仕組みを作りあげようとしているようです。『むらんでいあ』という活動が、社会の新しい地平を創りつつあることが実感されます<sup>58</sup>。

避難者の自立支援のための「心の箸袋プロジェクト」のプロジェクト費を捻出できたのも、この基金の成果である。東日本大震災は被災地が広域にわたるため、義援金が被災者のもとに届かないなどの問題が浮上したが、片品村では地域づくりを通して、顔の見える関係性のなか、「むらんでいあ」という自発的な活動をサポートする資金を得たといえる。

避難者支援自治体への後方支援は、ふるさと納税制度の利用などでも可能になるが、そうした後方支援を地域の自発的な活動のなかに活かしていく発想のヒントが、この基金の事例にあるのではないだろうか。

## 7.5 双方向的ボランティアの「物語」化

長期にわたって避難者を受け入れた片品村であるが、そこにピリオドが打たれる日がくる。苦労も喜びもひっくり返る村の財産にし、次なる地域づくりに生かしていこうという声は7月には既に聞かれていた。「むらんでいあ」の総仕上げは、村が避難者を受け入れて良かったと納得する終止符の打ち方だった。8月には、南相馬市の人たちが村に恩返しをしたいという気持ちを「恩返し隊」という形にして、有償で清掃作業をしてもらった。群馬県庁で開催された写真展「小さな村、片品村で起こったこと」では、南相馬市の人々、特に子供たちの片品村での日常を写した写真が展示された。

2011年10月、千明村長は避難者受け入れの終了を、以下のように記した。

「真冬のような雪景色の中での受入れから、桜の花咲く春を迎え、レンゲツツジの見頃の初夏が過ぎ、暑い夏も終わり、半年近くの長い避難生活となりましたが、8月末迄にはそれぞれ900人を超える被災者が、南相馬市などの自立先に向かい片品村を後にされました。

9月以降も片品村内で暮らす決意をされた4家族13人を除く、数名の被災者も、最後の1人の方が9月29日、自立先に向かわれ、南相馬市から派遣されていた職員も市役所に戻られました。

片品村がいち早く実施した3月18日の被災者受け入れも半年以上と、当初の予想以上

<sup>58</sup> 三人委員会(内山節・大熊孝・鬼頭秀一)・三人委員会哲学塾ネットワーク(世話人・澤田和子)による2001年4月10日の「『片品村の福島原発事故避難者受入支援のための義援金基金』に協力くださった方々へ」(<http://kitosh.k.u-tokyo.ac.jp/index.php/id=26>、最終閲覧日2011年9月1日)より。

に長期化致しましたが、ここに村民の皆さんを始めとする関係者の皆さんのご理解とご協力により、東日本大震災の被災者受け入れが終了致しましたことをご報告申し上げますと共に関係者の皆さんに対しまして厚くお礼を申し上げます。

被災者受け入れから今日まで、多方面から『人に優しい片品村』と、たくさんの感謝の声、励ましの声、お礼の声が寄せられております。長期間の被災者受け入れに対しまして物品両面からご支援ご協力いただきました皆様方に対しまして、心から感謝を申し上げますとお礼のご挨拶とさせていただきます。<sup>59</sup>

こうした試みが、避難者受け入れにあたった自治体すべてで行われたわけではない。だが、双方向的なボランティアや、避難者の自立支援のために力を注いだ活動は、避難者受け入れ地域のあちこちで聞かれた。片品村での避難者受け入れの「物語」化は、そうした地域の人々からも支持されるに違いない。

## 8. おわりに

著しい環境汚染によって地域を離れざるを得なくなった人々を「環境難民」と呼ぶことがある<sup>60</sup>。この用語自体はさほど古いものではないが、それが示す事象は多数、指摘することができる。イタリアのセブソの農薬工場爆発（1976年）によるダイオキシン汚染地区、ラブ・キャナル運河に廃棄された有害廃棄物による土壌汚染（1978年）、チェルノブイリ事故による放射能汚染（1986年）で高濃度に汚染した地区から人々が移転させられた事例などである。

日本では足尾鉍毒事件がこれにあたる。足尾鉍毒事件の研究で知られる菅井益郎は、「暮らしを豊かにするはずの文明」が谷中村の「村民の暮らしを奪い、住み慣れた村から追い出し、移住を強制した」ことに対し、「人々を難民化する文明とは一体何か」と問う。さらに、放射能汚染地域で福島県飯館村を訪れて『「これは現代の谷中村ではないのか』との思いを強くした」と述べている<sup>61</sup>。

足尾鉍毒事件は、故郷を離れた人々の強い望郷の念を教えてくれる<sup>62</sup>。1972（昭和 47）

---

<sup>59</sup> 「片品村役場―村長の部屋」(<http://www.vill.katashina.gunma.jp/mayor/mayor.html>、最終閲覧日 2011 年 11 月 1 日)。

<sup>60</sup> 「環境難民」という言葉は、中国の三峡ダム建設による移住問題、地球温暖化による海面上昇による移民問題などのほか、生態系を守るために保護区から住民を移住させる政策、中国のモンゴル自治区内で実施されている生態移民政策などでも用いられてきた。「環境難民」という用語とその問題点については、総合地球環境学研究所編 2010『地球環境学辞典』弘文堂、492-493 が簡潔に記している。

<sup>61</sup> 菅井益郎「談論誘発 田中正造の『警鐘』 人々を難民化する文明とは」、2011年7月27日付け『東京新聞』掲載。

<sup>62</sup> 林えいだい 1972『望郷―鉍毒は消えず』亜紀書房、北海道新聞 1971年5月1日、5月3日、

年、足尾鉍毒被災者が開拓に入った北海道佐呂間町栃木から、4度目の帰郷の請願のすえ、実に61年ぶりに被災者家族が栃木県に帰郷をかなえた。だが、それは請願に名を連ねた13世帯中の約半数にすぎなかった。ひとつの家族がふたつに割れ、帰郷する者と留まる者とにわかれた家もあった。

原発事故の終息まではまだ遠い。高濃度に汚染された一部地区は長期間、人が住めず、避難が長期化するという見解も示されてきたし、『原発難民』というタイトルの本も既に発刊されている<sup>63</sup>。

檜枝岐村でも片品村でも、南相馬市の避難者は「帰って行った」と表現する。自宅に帰ったならば、「難民」という言葉は適切でないかもしれない。だが、皆が自宅に帰ったわけではない。また、南相馬市に帰ったことが本人にとって最善の選択だったとしても、放射線リスクの問題を考えると手放して喜ぶことができない。今回の原発事故は、「難民」という非情な言葉以上に重く、辛い現状を生み出しているのである。自宅に戻れた人も、仮設住宅に入った人も、家族や親戚を頼って別の地域に移った人も、日々、困難な日常を精いっぱい生きているのだという事を忘れないでいたい。

\*本稿は、基本的に2011年4月17日から7月10日までの調査結果に基づいて執筆した。公表にあたっては、2011年11月6日時点までの調査に基づき、最低限のデータを補充した。7月10日以後の動向など詳細については、別稿にゆずりたい。なお、本稿は、2011年度科研費基盤研究(B) 22320002 『「農」の哲学の構築—学際的な拮がりの中で』（代表・鬼頭秀一）の成果の一部である。

---

6月8日、7月21日、7月22日、7月26日、8月6日、12月29日、1972年1月20日、2月7日、3月6日。

<sup>63</sup> 栗野仁雄 2011 『ルポ 原発難民』潮出版社、若松丈太郎 2011 『福島原発難民—南相馬市・一詩人の警告』コールサック社。